ご先祖様から私たちへの贈りもの

自然災害伝承碑の事例
（第四版）
京都府域（全体中間報告）

令和 6 年（2024）2 月 19 日

辻　謙一　（現地撮影・調査）

〇文章は一部、国土地理院地図等から引用
〇本資料は研究用として整理したものである
〇標題における「〇」は国土地理院地形図に掲載済箇所「●」は未掲載箇所
〇自然災害伝承碑に準ずる災害の痕跡も掲載している

淀川水害(明治 18 年)　1 箇所（以下同）--------P8～

●京都市　伏見区　水垂墓地

丹後大震災　39--------P10～

●京丹後市網野町　郷村断層(下線表示は、第四編の追加箇所　以下同)
●京丹後市峰山町　峰山小学校
○京丹後市峰山町　丹後震災記念館
●京丹後市網野町　心月寺
○京丹後市網野町　消防署網野分署北

●京丹後市網野町　松泉寺
●京丹後市網野町　青原寺
○京丹後市網野町　明光寺
○京丹後市網野町　島津
●京丹後市網野町　蓮華寺

●京丹後市弥栄町　長命寺
○京丹後市網野町　府道沿
●京丹後市峰山町　相光寺
●京丹後市峰山町　金峰神社参道横
○京丹後市峰山町　増長院

●京丹後市峰山町　十方院
○京丹後市峰山町　常敢寺
●京丹後市峰山町　八幡神社
○京丹後市大宮町　三要寺
●京丹後市大宮町　毘沙門堂

●京丹後市大宮町　常徳寺
●与謝野町岩滝町　板列神社
●京丹後市大宮町　溜池耕地復旧紀念
●京丹後市弥栄町　西方寺
●京丹後市網野町　網野神社

●与謝野町野田川町　下山田
●与謝野町野田川町　市場小学校
●与謝野町野田川町　阿知江磯部神社
●与謝野町加悦町　美容院
●与謝野町野田川町　三つ葉グラウンド

●与謝野町野田川町　梅林寺
●与謝野町加悦町　西新様
●与謝野町加悦町　加悦中学校東
●与謝野町加悦町　旧加悦町役場庁舎
●与謝野町加悦町　加悦鉄道

●与謝野町岩滝町　板列（いたなみ）神社
●与謝野町岩滝町　男山板列（いたなみ）八幡神社
●与謝野町岩滝町　木積神社
●与謝野町岩滝町　弓木墓地

室戸台風(学校内)　8--------P75～

●京都市　東山区　京都女子大学
●京都市　山科区　勧修小学校
●京都市　伏見区　桃山高等学校
●京都市　南区　大藪小学校
●京都市　伏見区　向島小学校

●京都市　右京区　西院小学校
●京都市　左京区　養正小学校
●京都市　伏見区　下鳥羽小学校

室戸台風(その他)　10--------P91～

〇京都市　東山区　知恩院南
●京都市　右京区　高山寺
●京都市　東山区　大谷本廟
●京都市　上京区　妙蓮寺

〇八幡市　善法律寺

●京都市　東山区　大谷本廟二天門
●京都市　伏見区　向島西堤共同墓地
●京都市　上京区　西陣小学校（廃校）
●福知山市　雲原　雲原砂防
●京都市　南区　鳥羽地蔵

昭和 10 年水害　5--------P117～

〇京都市　上京区　上立売通
●京都市　北区　御薗橋下流左岸の集落地
●亀岡市　鵜ノ川左岸堤防　改良記念碑
●京都市　東山区　三条大橋
●京都市　下京区　松原橋

亀岡平和池水害　3--------P125～

〇亀岡市　平和池ダム跡地
〇亀岡市　篠町柏原　年谷川堤防
〇亀岡市　矢田天満宮

昭和 28 年水害　17 ※同年の台風 13 号水害も含む　P128～

〇宇治田原町　郷之口
●井手町　玉水駅構内
●井手町　石垣区公民館
●井手町　高神社
〇南山城村　北大河原

〇木津川市山城町　南綺田
〇木津川市山城町　北平尾
〇木津川市山城町　北河原
●井手町　宮本水車舊址
●和束町　大井手用水災害復旧

〇和束町　和束中学校門前
●井手町　玉川　左馬
●宇治市　西体育館
●宇治市　南小倉小学校
●久御山町　大池神社

●京都市　伏見区　巨椋池排水機場
●久御山町　久御山排水機場

由良川水害　20　　※水系含む(昭和 28 年水害は内数)

--------P162～

●福知山市　御霊公園
●福知山市　大江町　河西体育館
●福知山市　大江町　蓼原民家
●福知山市　大江町　蓼原堤防
●福知山市　大江町　道路嵩上記念

●福知山市　大江町　頌徳碑
●京丹波町　和知町　舟戸橋
●南丹市美山町　大野ダム
〇綾部市　水の記憶の碑小公園
〇福知山市　福知山河川国道事務所隣接地

〇福知山市　由良川左岸堤防
●福知山市　治水記念館
●福知山市　法川排水機場
●福知山市　堤防神社
●綾部市　綾部用水堰

●舞鶴市和江　瀬戸島開紀功碑
●福知山市　一級河川土師川河川災害復旧助成事業完成記念碑
●舞鶴市　国道 175 号
●福知山市　大江町東
●福知山市　雨過天晴

火災　8--------P202～

●南丹市日吉町
●京都市　上京区　清浄華院
●京都市　上京区　円通寺
●京都市　中京区　瑞泉寺
●京都市　上京区　本隆寺

●京都市　中京区　染殿院
●京都市　中京区　妙泉寺
●宇治市　神女神社

疫病　1--------P218～

●伊根町　丹後大仏　スペイン風邪

分類困難・その他　26--------P220～

●京丹後市丹後町　京丹後市立丹後古代の里資料館　皺榎の倒木　風害
●宮津市　波せき地蔵堂　津波
●南丹市八木町　上桂川統合堰　水害
●南丹市八木町　大堰橋上流右岸堤防　水害
●亀岡市　亀岡駅南　水害標識塔　水害
○亀岡市　東別院村　水害
●京都市　下京区　明王院不動寺　水害
●京都市　伏見区　羽束師神社境内　水害
●京都市　南区　天神川（現西高瀬川）改修碑　水害
●京都市　右京区　御室川治水碑　水害

●京都市　西京区　大悲閣千光寺　大堰川開削工事での犠牲　水害
●京都市　西京区　桂川左岸　水難
○八幡市　八幡在応寺（三川合流背割り）伊勢湾台風最高水位記録標識　水害
●八幡市　さくらであい館　倒木さくら加工ベンチ　風害
●宇治市　巨椋土地改良区敷地内　水害

●宇治市　塔の島　浮島十三重石塔　水害

●城陽市　城陽排水機場内　水害
●城陽市　奈島　淀姫さん　水害
●久御山町　若宮八幡宮　水害
●久御山町　室城神社①　水害

●久御山町　室城神社②　風害
●久御山町　大松寺　木津川決壊　水害
●木津川市木津町　正覚寺境内　洪水供養阿弥陀石仏　水害
●木津川市山城町　泉橋寺　水害
●木津川市木津町　木津惣墓五輪塔　水害

●木津川市木津町殿城所在地　関東丹後但馬大震大災死者大菩提　地震

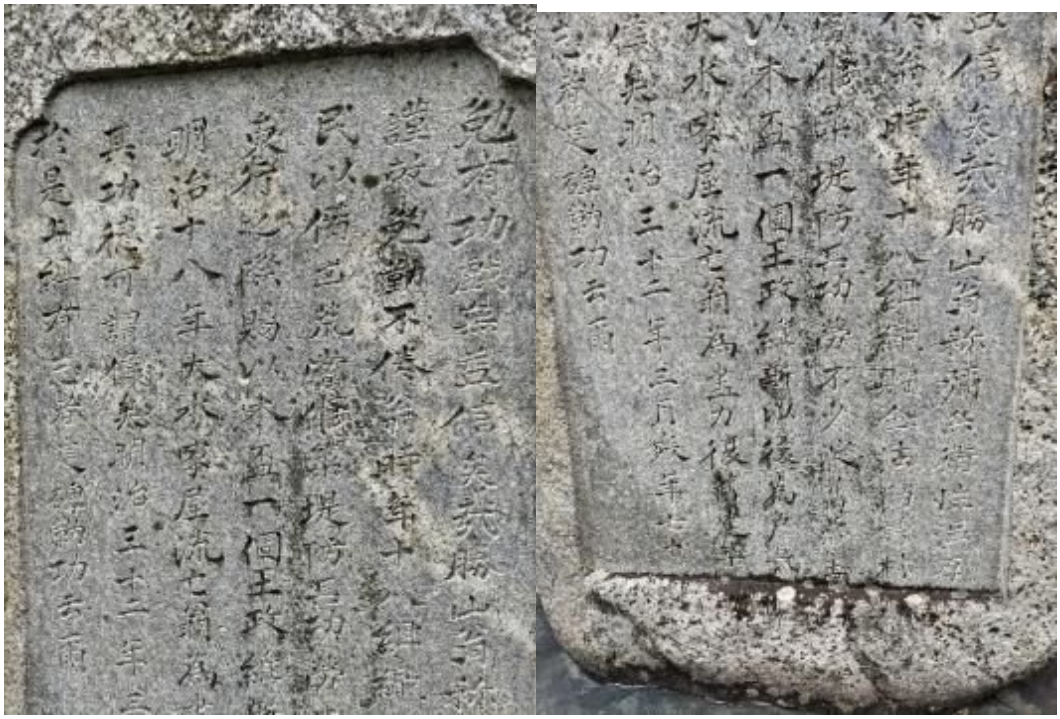
計 138 箇所

番外（自然災害伝承碑ではないものの極めて教訓性が高いもの）

--------P267～

●京丹波町和知町　セカンドベスト避難所　水害
●福知山市大江町　蓼原災害駐車場　水害

●京都市　伏見区　水垂墓地　明治 18 年淀川水害



（碑文　背景）

当時の戸長勝山弥兵衛顕彰碑

明治 18 年(1885)の水害の時、桂川に面した水垂地区は堤防が決壊して、27 戸が流失する大きな被害となった。

この時流失を免れた家は、いち早く建具をはずし、土塁を落として、水流を受け流していたため無事であった。

こうした災害への知恵はたびたび水害に見舞われてきた地域ならではの文化である。

舟運が盛んな地域であったため、被災後しばらくは舟での生活を送った。流失した家財道具は、桂川を逆流して上流域に流れ着いたものは、送り返されてきたものもあった。

戸長勝山弥兵衛は、この水害からの復興に力を尽くした。

●京丹後市網野町　郷村断層　丹後大震災

◆樋口地区

（碑文　背景）

昭和 2 年(1927）3 月 7 日に発生した北丹後地震（M＝7.3）で出現した 2 本の地震断層のうちの一つ（他は山田断層）。

郷村断層は、京丹後市網野町浅茂川西方から京丹後市大宮町口大野まで、北北西-南南東方向に延びる全長 18km の地震断層である。

郷村断層は、東北東-西南西に伸びた山田断層とともに動いたこと、地震直後に科学的な調査が行われた「活断層」という用語が日本で最初に用いられたことなどで非常に重要な地質遺産である。

昭和 4 年（1929）には、網野町郷の小池地区と樋口地区、網野町生野内の 3 地点に現れた断層が国の天然記念物に指定され保存されている。

網野町郷の樋口地区では断層が小屋の中に保存されており、ここでの変位量は水平方向に 2.75m、垂直方向に 60cm で、特に垂直方向の変位がよくわかる。

◆小池地区

◆生野内地区

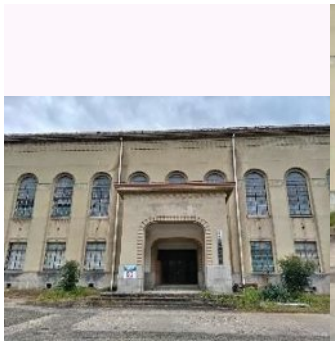
（碑文　背景　京都府 HP から引用）

京丹後市網野町浅茂川西方から下岡、高橋、郷、生野内を経て京丹後市峰山町、京丹後市大宮町口大野へ至る全長 18km の郷村断層が出現した。北北西―南南東走向を持ち、全体として左雁行配列をなす 10 本程度の断層群からなる。

断層の西側が最大で約 100cm 隆起し、左ずれは最大で 270cm に達した。左ずれの最大変位を示すのは網野町高橋付近で、ここから南北両側へ離れるにつれて変位量が小さくなっている。活動再来周期は、垂直変位速度と地震変位量から

約 1 万年程度と推定されている。
昭和 60 年（1985）、地質調査所により、網野町立郷小学校北方でトレンチ調査が行われ、断層破砕帯を伴う明瞭な断層面が現れた。
郷村断層に沿って発達する断層変位地形は、西側上がりの比高約 50m の低断層崖、及び約 100m の谷や尾根の左ずれオフセットで、累積変位が明瞭である。
郷～生野内間では花崗岩からなる丘陵性山地の尾根や谷に系統的な左ずれが見られ、高橋付近など数か所で段丘面を変位させている。
明治以後、日本の地震断層は 20 例ほどしかないこと、昭和 2 年（1927）の地震時に山田断層とともに共役系地震断層が生じたこと、はじめて科学的な地震及び断層調査が行われたこと、「活断層」という用語が日本で最初に用いられた点などで重要である。
また、山田断層帯と並んで、京都府北部の地殻変動を解明し、地震予知の情報を得る上でも重要である。現在、沖積平野では圃場整備が進み、地震時に変位した地形は、ほとんど確認できなくなっている。
なお、国の天然記念物として網野町郷の小池地区、樋口地区及び生野内の 3 地点において断層が保存されており貴重である。

●京丹後市峰山町　峰山小学校　丹後大震災



（碑文　要約）
震災殉難碑
学校長　内田昌三謹書
青年訓練所生徒　十名
實業補習学校生徒　四名
實科高等女学校
　教諭
　生徒　十二名
尋常高等小学校
　訓導
　児童　百三十七名
幼稚園
　保姆
　園児　四十一名

※碑陰には、206 名もの園児・児童・生徒と 8 名の訓導が亡くなったことが刻まれている。
　断層の割れ目から取り出した自然石が、峰山小学校玄関南の殉難碑である。

『峰山町役場日誌』（新治書記）
昭和二年三月七日　月曜日　晴。古川、中邑両書記午後賜暇。地震ノ為メ中邑書記圧死セラル。
（外来者）新舞鶴分駐所働務陸軍憲兵伍長近藤国治郎氏来場。
（会合）午前十時ヨリ公会堂ニ於テ町村長会開催。
（記事）本日午後六時二十八分大地震アリ。全町殆ド倒壊。続イテ各所ニ火災起リ、杉谷、吉原ノ一部ヲ除キ全焼シ、死者千百数十人。重軽傷者亦数百人ニ達シ、其ノ惨状筆紙ニ尽シ難シ。地震ト同時ニ役場モ傾キ、公会堂ハ倒壊セリ。小使岡本源造ハ火気ノ注意ヲ為シ、爐ハ水ニテ消シ、其後徐ロニ退場避難セリ。
三月八日　火曜日　曇　太田助役、谷部、田中書記震災救助米、杉谷デ交渉。太田助役終夜動務セラル。
（注、第一回町議会は三月三十日で、道路計画、学校、公会堂建築の件が議題であった。）

『峰山町大震災誌』
三月八日、天明に及んで全町の火災は稍終熄せんとするも、濛々たる黒煙は町

内一歩も入るるに由なく、只、貌を膨らし右往左顧、密集に分け入りて避難者の点検に努むるも、哭泣の声各所に起り、且つ肌は顫ひ、食するに糧なく、午後四時頃には雨をも交へ、極度の疲労を感ずるに至りて、各所の森林中の集団は雪中に卒倒するもの多数を生ずるに至る。雨雪と闘ひ、妻子の白骨を前に一枚の莚もなし。郵便、電信、汽車、電灯、糧食、薪炭、塩、夜具を一時に断たれたる身は、一椀の白湯を需むるに由なく、近隣の村落皆倒潰又は全焼し、救助の人何れかより有るべき筈なく、衣食住を失ひたる罹災者は、恰も児を喪ひて狂える野生の動物と選ぶなく、雨雪を浴びて白骨の埋まる宅地を彷徨するのみなりき。……云々（田中信吉記）

雪の中を着のみ着のままで、森や広場に避難した家族を探してさまよい歩く空腹の人々の上に、無慈悲にも八日の午後四時頃から霙が降りそそいだ。この霙の味は、本当に忘れられない。峰山市街で一家全滅は四十一戸に達していた。その中の一人、宮田澄助（子行）は『峯山町誌』を脱稿し原稿を松川先生に托して、三月八日東京の出版所へ送るその前日に罹災し、一家はもとより松川先生、町誌原稿および収集した資料一切が殉難焼滅した。峰山小学校で罹災した峯山藩文書、町家で焼けた町年寄記録、その他手控、覚書など、郷土にとってこの上もない不幸であった。
この災害の翌日、生き残った町長以下十一名の吏員は、自家の不幸をよそに消防の協力を得て、まず新山村から米三十八俵、杉谷から二十俵を徴発して応急救助にあたった。こうした涙ぐましい活躍の記録は、各町村、各公衙、学校、職場、その他、町村内の各所において限りなくあった。しかしまた「……天田郡上川口村消防隊四十五名は、魁として到着…」と同誌に記されているとおり、罹災地外からの救援はことに目覚ましく、この感謝は、奥丹後のつづくかぎり語り伝えられるであろう。

●京丹後市峰山町　丹後震災記念館　丹後大震災

丹後震災記念館
京都府指定文化財　平成１７年指定

（碑文　原文）

峰山町震災記念塔銘

嗚呼昭和二年三月七日うらゝかなりし春の日も霞の山にかくれ暮色漸せまると雖も雪消の點滴なほ軒に静かにして或は浴槽に或は食卓に或は爐邊に一家嬉戯談笑しつつ一日の労を養へりしをりしも時針正に六時二十七分突如として、起りし大鳴動は激震を伴ひ乾坤覆り屋舎砕け町の内外忽にして叫喚の巷と化しぬ劫火燃え餘震しきりつ救を呼べりし四方の聲も時のまに埃烟の中に消えゆきて骨肉隣保索ねむに由もなきに暴風雨雪や洪水や相次いで残息の上に襲ひ來り其の凍餒に苦しめられし状は筆舌のよく盡す所にあらさるなりかくて死者千百三人傷者五百三十三人家屋の全焼せるもの八百三十六同全壊せるもの百四十九建造物財貨の損害三千百十九万餘圓を算するに至れりそが中に一家全壊して永く祭祀を絶ちしもの四十戸に及びしぞ酸鼻の極みなりける災害の趣　天聽に達するや良くも町民の痛苦を　軫念あらせられ九日には多くの救恤金を賜はり十日には侍従を派して親しく慰撫せしめ給ひき中外國民の同情もまた翕然として集まり救護慰問至らざるなかりしが中にも軍隊竝新聞社の活躍とわが京都府官民の盡瘁とはまことに人力を超えて目さましきものありき爾来二星霜街區の整理店舗の新装公宇の造營皆既に成りて戸口日に増加し隆昌昔日の股賑を凌駕せむとするものあるは町民がよく更生の意氣を以て専念事に従ひたると前町長中村治作現町長太田静男初め當事者の己を殺して公に奉したるとの致す所なり然れども復興の完成は容易の業にあらず町民心を一にして永に不斷の努力を持續し轉禍為福の素志を達成して以て上は　聖明の　宸息に對へ奉り下は内外の同情に報ひむ事を期せざるべからずなりすなはち薬師山上を下して震災記念塔を建て且は受難の精霊を祭り且は後昆の艦弐に供へむがため事蹤を録して塔背に刻すといふ

京都帝國大学教授文学博士吉澤義則撰文
京都府文書課長濱谷由太郎書
京都芳村茂右衛門刻

●京丹後市網野町　心月寺　丹後大震災

（碑文　原文）

震災慰霊塔

昭和二年三月七日網野町西区

震災横死者二百八十六名

昭和八年三月七日當山二十世立之

〇京丹後市網野町　消防署網野分署北　丹後大震災

（碑文　原文）

震災記念碑　　京都府知事　濱田恒之助書

昭和二年三月七日午後六時二十八分
全焼　二九十戸
半焼　五戸
全潰　五四七戸
半潰　二九一戸
死亡者　二八六人
重軽症者　五一〇人

（碑文　背景）
京都府知事濱田恒之助の就任期間
大正 15 年（1926）9 月～昭和 2 年（1927）4 月
明治 3 年（1870）、高知県生まれ。憲政会系知事として知られ、原敬政友会内閣のときには浪人生活を送った。
憲政会が勢力を取り戻すと官界に復帰し、広島県知事を経て京都府知事となる。
在任は半年あまりであったが、府立女子専門学校の新設、府立医大・第一中学校の改築などを行った。
昭和 2 年（1927）3 月、丹後大震災が発生し、その対策に追われる最中、若槻礼次郎憲政会内閣は崩壊し、田中義一政友会内閣により浜田知事は休職となった。

●京丹後市網野町　松泉寺　丹後大震災

（碑文　原文）

震災慰霊塔

昭和二年三月七日午后六時二十六分北丹後大震災

死焼者当二十祖中五十四名の霊　昭和五十一年八月建立

発起人住職吉岡俊峰

●京丹後市網野町　青原寺　丹後大震災

（碑文　原文）

震災供養塔

昭和二年三月七日午後六時二十七分

青原十三世樋口孝賢建立

当区全壊　住宅五十一戸

　　其他四十四棟

　　重傷男八名女五名

〇京丹後市網野町　明光寺　丹後大震災

（碑文　原文）

震災記念碑

昭和二年三月七日午后六時卄七分突如起ツタ丹後大震災ハ其震央近畿一体に亙り其被害丹後四郡二及ブ当地方有史以来ノ大惨禍デアッタ　山ハ崩レ綿ハ埋レ地ハ裂ケ屋ハ倒レ火災の猛威之二乗ジ三千ノ生霊ト七千余ノ住家ヲ奪イ一家団欒ノ楽シミヲ一瞬二阿鼻叫喚ノ巷ト化シタ　就中震源地タル郷区ハ垂直変位〇九五米水平変位三.一五米ノ断層ガ示ス如ク其被害最モ激甚ヲ極メ山野田畑道路ノ別ナク亀裂断層陥没転差崩潰等ヲ生ジ総戸数一五五戸中僅カニ半潰二戸ヲ除キ凡ベテガ全潰シ三六戸ガ全焼シタ　尚即死者六三重軽傷者百四十五ノ犠牲ヲ出シ三尺余ノ積雪ノ上二坐シテ寒雨二濡レ飢ト寒サニサラサレテ親子兄弟夫婦姉妹互ニ相求メテ泣キ叫ブ相ハ追憶スルダニ慄然タラザルヲ得ない　茲ニ吻心両面ニワタル國ヲ挙ゲテノ救援ト海外カラノ厚キ同情トニ対シ哀心ヨリ感謝シツツ惨禍ノ概要ヲ記シテ後世回顧ノ資トスル

昭和三十四年記念日建立

〇京丹後市網野町　島津　丹後大震災

（碑文　原文）

震災記念碑　京都府知事　佐上信一　著

維持昭和二年三月七日午後六時二十八分突如大震来襲ス被害総見積額四三五八, 四五二圓死者二三五人重軽症者二八〇人家屋全焼一五三戸半潰四〇五戸實二慘禍ノ極義捐金受入額二九七, 二三七圓感絶復興ヲ期ス

●京丹後市網野町　蓮華寺　丹後大震災

（碑文　原文）

震災供養塔

昭和二年三月七日午後六時二十七分起大震火災

殉難死者百七拾五名　内訳区民百四拾五名　外来者　三拾名

為昭和二年三月七日横死者　永平監院泰禪書

●京丹後市弥栄町　長命寺　丹後大震災

（碑文　原文）

供養塔

昭和二年三月七日午後六時三十分震動

北丹後地震により祖徒十六名の遭難死者有り各諸精霊の追善供養と諸方無縁の亡者倶に佛門の光明台に登り速やかに大悲の菩提を圓かにせんが為也

昭和五十一年三月七日

施主　八島屋井上正次建立

長命寺十五世一宇俊鳳代

〇京丹後市網野町　府道沿い　丹後大震災

（碑文　原文）

嗚呼大震碑

昭和二年三月七日午後六時半俄然一震遂失人命八出傷者十家屋被全三残余二十有八悉其災然而依興　聖恩之高四海同情之深入復興之域故刋石於以遺後世矣

昭和三年三月七日　　仲禪寺

(碑文　要約)
昭和 2 年(1927)3 月 7 日午後 6 時 27 分に北丹後地震が発生した。旧島津村の仲禅寺地区では死者 8 名、負傷者 10 名、家屋は 3 戸を残して約 20 戸が全焼した。旧島津村全体では、死者 230 名、重傷者 103 名、家屋の全壊 280 戸、半壊 116 戸、全焼 152 戸の被害が生じた。

●京丹後市峰山町　相光寺　丹後大震災

（碑文　原文）
震災供養塔
昭和二年三月七日
罹災者
為五十四咯菩提

●京丹後市峰山町　金峰神社参道横　丹後大震災

（碑文　原文）

震災殉難碑

昭和二年三月七日午後六時二十七分突如トシテ丹後一圓ヲ襲ヒタル大激震ノ為峯山區裁判所廳舎倒潰シ宿直勤務中ノ廷丁谷口鶴蔵君ハ廳舎ノ下敷トナリ無惨ノ壓死ヲ遂ゲテ殉職セラレ同検事局書記木原木作君及び執達吏木村脩郎君ハ峯山町ノ自宅倒潰ノ上全焼シ其家族ト共二無惨ノ焼死ヲ遂ゲラル洵二痛恨二堪ヘス又當日宿直員タル糸井正一君ハ谷口廷丁ト共二倒潰廳舎ノ下敷トナリタルモ危ク壓死ヲ免レタルニヨリ火氣ヲ消シ火災ノ難ヲ救ヒタルハ隠レタル不滅ノ功績ト言フベシ

回顧スレハ茲二十有四星霜世人ノ漸ク此ノ悲惨ヲ忘レントスル時發起人相謀リ本此ヲ建立シ且供養基金ヲモ寄託シ以テ殉難者ノ霊ヲ永ニ供養セントス誠ニ奇特ト言フヘシ茲二殉難者ノ冥福ヲ祈ルト共ニ記念トシテ永ク後世ニ傳フルモノナリ

昭和十五年十月　　従七位勲八等　増田實蔵併書

〇京丹後市峰山町　増長院　丹後大震災

（碑文　原文）

震災供養塔

維持昭和二年三月七日當町大震火災に遇ひ惨死者千百三名實に悲惨の極みなりと此處に京都在住同町出身者發起となり此の塔を建て永遠に其の精霊を供養する者也

峯友會

昭和三年十月七日

現東福行藏誌之

●京丹後市峰山町　十方院　丹後大震災

（碑文　原文）

震災供養塔

可恐可惶昭和二年三月七日俄然大震火災襲奥丹之地惨又凄仍為祈冥福建塔併鐫兒孫留記矣

昭和八年智源祖岳選之並書

〇京丹後市峰山町　常敢寺　丹後大震災

（碑文　原文）

震災記念供養塔

昭和二年三月七日午後六時三十分奥丹後大震災二於ケル長岡区域被害状態
全戸數百八十二戸ノ内全焼二十六戸半焼二戸計六十二棟全潰百十六戸半潰三十二戸死者男二十六名女三十三名重傷者男二十名女三十三名軽傷者男二十一名女二十四名　公共建築物被害小学校村役場駐在所神社寺院各全潰全焼二被害見積額七十三万九千八百七圓

昭和六年三月七日建立
發起者　至誠會

震災遭難者死者氏名　計五十四名　　外二外来死者六名

●京丹後市峰山町　八幡神社　丹後大震災

（碑文　原文）

震災復旧溜池工事完成紀念

昭和二年三月七日起突如為大激震損多人命被疫儘財實等悲惨絶言語中就被破壊溜池帰耕地荒廃將村民不成憂懼尋常時恰政府依救済組織耕地整理組合専念工事忘寝食協力一致以漸達完成域而茲紀念是

昭和四年夏建立

○京丹後市大宮町　三要寺　丹後大震災

（碑文　原文）
昭和二年三月七日
大震災紀念之碑　　金閣敬宗書
被害状況
全焼　三要寺庫裏及び人家三戸
全潰　仝本堂毘沙閻堂外人家七十八戸
半潰　人家四十九戸
即死者　二十六人負傷者四十六人

昭和三年八月建立
發起人　一誠會　維明會　　親友講

●京丹後市大宮町　毘沙門堂　丹後大震災

（碑文　原文）

毘沙門堂再建者寄附者芳銘

昭和二年三月突如奥丹後を襲った大震災により御堂は倒壊し参道も崩れたるにご本尊並びに鬼瓦は微損せず保存されていた。昭和十三年復興を発願、同十三年保存されていた現在の規模を見出し再建された。

●京丹後市大宮町　常徳寺　丹後大震災

（碑文　原文）

供養塔

昭和二年三月七日午後六時二十七分突發セル大激震二於テ我村ノ被害最モ甚シク惨状言語二絶ス　死者五十ニ名負傷者百二十九名役場学校社寺病舎を始メ民家ノ全潰百八十四戸半潰百六十四戸全焼四十四戸に及ブ動産不動産ノ損害實二二百有余萬圓全村殆ンド潰滅ス　表記諸氏不幸其犠牲トナラレ痛恨永へニ盡キス　仍ッテ茲に供養塔ヲ建設シ以テ慰霊ノ悃ヲ表ス

昭和三年九月二十三日　口大野村建立
本門宗管長大僧正日正禅並書
京都芳村茂右衛門　刻

震災死亡者氏名　口大野村

北丹後大震災寺号塔崩壊新調復刻
寄進　檀信徒一同

●与謝野町岩滝町　板列神社　丹後大震災

（碑文　背景）
即位大典記念
大正４年(1915)に建立されたが、北丹後地震時に下から一尺のところで折れ、倒壊したが、文字に損傷がなかったためそのまま復旧した。

●京丹後市大宮町　溜池耕地復旧紀念　丹後大震災

（碑文　原文）
溜池耕地　起工昭和二年九月　竣工昭和三年十月　工事費四萬二千圓
昭和五年三月建立　善王寺耕地整理組合

（碑文　背景）
この溜池は「立臼ため池」と呼んでいるもので、「奥丹後震災誌」（京都府発行、昭和 3 年(1928)5 月）によると、「長善村（当時）も百八十町歩の田耕地中百三十五町四反歩までの被害あり、村内を通じて七ヶ所の溜池がことごとく堰堤の亀裂はなはだしく、堤糖の復旧のみで維持保存し得られるのは僅かに二か所で、他は全部改築を要する状態となった」とある。具体的な記述はないが、立臼ため池も、丹後震災の際被災したものと推定される。
また、「私たちの大宮町」（大宮町社会科研究会、昭和 61 年(1986)）に記載されている、「ため池調べ」（子供たちの聞き取りによる）を見ると、「（前略）昭和 3 年(1928)に池を大きくして、田んぼに必要な水をためた。（後略）」とある。
時期的に丹後震災からの復旧による可能性が高いものと推定される。また、単に復旧しただけでなく、池を大きく改築したことが想像される。

●京丹後市弥栄町　西方寺　丹後大震災

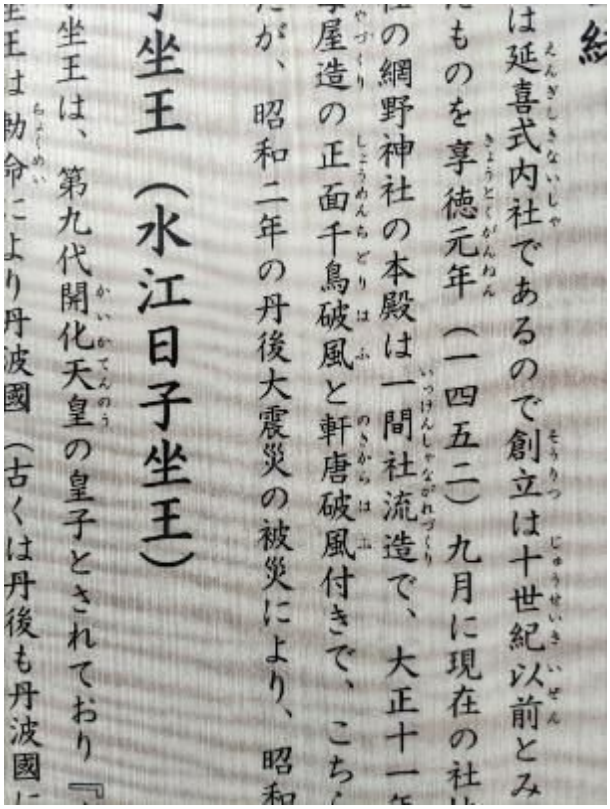
（碑文　要約）

北丹後震災供養塔

拾参世恵運代

相當七回忌昭和八年三月七日施主　當寺祖中　英昌工場

●京丹後市網野町　網野神社　丹後大震災



（碑文　要約）

当社は、延喜式内社であるので創立は十世紀以前とみられています。元々は、三箇所に御鎮座されていたものを享徳元年（1452）9 月に現在の社地に合併奉還されたと伝えられている。

現在の網野神社の本殿は一間社流造で、大正 11 年（1922）に建てられたもの。

拝殿は入母屋造の正面千鳥阪破風と軒唐破風付きで、こちらも大正 11 年（1922）に本殿と同じくして建てられたが、昭和 2 年(1927)の丹後大震災の被災により、昭和 4 年（1929）に再建された。

●与謝野町野田川町　下山田　丹後大震災

（碑文　原文）

震災供養塔

維持昭和三年十月建立　　石工　太田金次郎

●与謝野町野田川町　市場小学校　丹後大震災

（碑文　原文）

震災供養塔

昭和二年三月七日午后六時二十七分突如トシテ丹后四郡ヲ襲ヒタル地震ハ未曾有ノ大激震ニシテ逃避スルニ方所ナク父ハ子ヲ顧ルノ隙ナク母ハ弟妹ヲ念フ暇モナシ嗚呼猛火ノ凶焔天ヲ焦シテ阿鼻叫喚ノ巷ト化シ一夜ニシテ焦土ト變リシ我村ノ惨状ハ目ヲ以テ聴クベカラズモノアリ家屋ノ焼失タルモノ百八十九戸倒潰シタルモノ百六十四戸半潰シタルモノ三十九戸又男女三百一人ノ死亡者三百四十四人ノ負傷者アリ其他貨財ノ損害田畑山林等ノ被害ハ枚擧ニ遑アラズ終ニ身ヲ以テ災禍ヲ免レタルモノ住ム家屋無ク食ニ米粟ナシ飛報一タビ傳ハルヤ國ヲ擧ゲテノ同情ハ翕然トシテ集リ畏クモ　陛下ハ御内帑金ヲ下賜セラレ皇族各殿下モ御見舞金ヲ賜ハリタリ一般ノ義捐金ハ二十数萬圓ニ達シ慰問品ハ積ンデ同情ノ山ヲ成シ或ハ醫療勞力ノ救援等我村復興ノ前途ニ多大ノ光明ヲ與ヘラレタリ爾来四ケ年　聖恩ノ至大ト同胞ノ同惜ノ萬一ニ報ント感激セル村民ヒタスラ復興ニ向ヒテ勤儉力行以テ各生業ニ安ンスルニ至レリ令其ノ梗概ヲ誌シテ以テ後昆ニ貽ス

昭和六年五月　建立　市場村

●与謝野町野田川町　阿知江磯部神社　丹後大震災

（碑文　原文）

昭和二年三月震災復興社殿造営記念　社掌　阪根冨諄

氏子總代　坂根直右衛門　山添百蔵　浪江真治郎

アヤベ駅前　前原石材店

●与謝野町加悦町　美容院　丹後大震災

（碑文　原文）
縮緬創業記念碑

※地震により上部が破損し、与謝野町三つ葉グラウンドに新規建立された。
　なお、破損した石碑も現在も設置されている。

●与謝野町野田川町　三つ葉グラウンド　丹後大震災

縮緬創業記念碑

江戸時代中期、丹後は大凶作と絹織の衰退などにより人々の生活が困窮するなか、この窮状を救うため、丹後国加悦町の手米屋小右衛門・三河内村の山本屋佐兵衛は、志を同じくする後野村の木綿屋六右衛門の助力を得て、「ちりめん織り」を丹後に導入しようと、京都西陣の織屋へ奉公に入り、その技術を習得して一七三三年（享保七年）に帰郷。惜しみなく民衆に伝授し、現在まで続く「丹後ちりめん」の礎を築いた。

「縮緬創業記念碑」は、当地域の縮緬創業に偉大な功績を残す三翁を顕彰するために、一九二六年（大正十五年）秋、丹後縮緬同業組合与謝郡支部裏庭の当地に建立された。しかし、昭一九二七年（昭和二年）三月七日に発生した丹後震災で倒壊し、現在の碑は、一九二九年（昭和四年）九月に再建されたものである。

碑銘は、建立当時の商工大臣 藤澤幾之輔氏が揮毫し、碑の背面には丹後織物中興の祖 津屋武一丹後縮緬同業組合初代組合長の碑文が刻まれている。

碑に隣接する「西原雄助翁之像」は一九三五年（昭和十年）十一月、国機検査の実現やこの地に染織講習所を設立するなど数のこれまでの功労を讃え、同所の卒業生と有志が寿像を建立したが、一九四三年（昭和十八年）太平洋戦争のため供出。その後、丹後織物工業組合、加悦町商工会、三河内機業組合が中心となり地元関係者に呼び掛け、一九六五年（昭和四十年）十一月に復元したものである。

丹後織物工業組合
与謝野町商工会

（碑文　原文）

縮緬創業記念碑

元碑昭和二年三月七日北丹大震災ニ因リ破壊同四年九月本碑再建

西村雄助翁之像

翁ハ常二組合ノ中枢ニ在リテ北丹大震災ノ復興國練検査ノ敢行工業組合ノ設立鏸經營等二當リ別二京都府會議員又は加悦町長トシテ地方ノ爲メ將タ斬業爲メニ其功勞顕著ナルモノアリ

●与謝野町野田川町　梅林寺　丹後大震災

（碑文　原文）

供養塔

昭和二年三月七日午後六時二十八分奥丹二大震災起リ被害ハ與謝中竹野熊野四郡五十八ケ町村ニ渉り死者実ニ二千九百九十ニ名全焼戸数二千二千九百五戸倒潰戸数一万二千四百四十四戸総損害一億五千万圓ト算セラル其震度ノ強キコト我國古來稀ナリ本村ハ山田村断層ニ近ク被害モ亦従ツテ甚大ナリ人口千九百九名中死者五十四名ト他籍者六名重傷者六十六名軽傷者六十一名全焼戸数六十七戸全潰戸数百三十一戸半潰戸数百九戸小學校村役場ハ半潰ナリシモ幸ニ重要書類ハ全キヲ得タリ倭文神社梅林寺ハ被害ナラス村ノ損害約百五十万圓陸海軍ノ出動及日本赤十字社近接府縣各救護班ノ救援ニ依リ死體ノ発掘倒潰家屋ノ措置通路ノ整理等援助セラル此報一度　天聴ニ達スルヤ痛ク御軫念アラセラレ畏クニ土屋侍従ヲ御屋遣遊ハサレ親シク御慰問ヲ給ハリシノミナラス御内努金千百九十六圓九十銭ヲ御下賜セラル谷宮厳下ヨリモ御見舞トシテ金五十九圓九十六銭ヲ賜ハリシコトハ惟々感泣ノ外ナシ全國民ノ同情ニヨリテ義捐金十ニ万千百九十九圓九十銭其他家具衣類食料品等府二於テハ罹災救助資金ヨリ七千百十七圓四十三銭各分與ヲ受ク村ノ復旧事業二就テハ住宅資金十七万七千八百圓機業資金十七万七千八百圓産業資金九千六百九十四圓機業運轉資金八万五千圓小学校村役場復旧資金二年度歳入欠陥資金一万八千圓ノ低利資金ニ依リ政府及府當局ノ指導ト村民ノ一致協力トニ依テ令日ノ復興ヲ見ルニ至ル村一般ノ特志ヲ以テ慰霊ノ爲ノ斬ノ供養塔ヲ建設シ録シテ記念トス

昭和七年秋日　當山十世此興宗誌之

●与謝野町加悦町　西新様　丹後大震災

（碑文　原文）

震災記念

昭和二年三月七日午後六時半奥丹後四郡震災　被害五十八町村　死者傷者各三十人　全焼全壊六千八百戸半焼半壊一万戸被害價格八千二百万円　我家全倒潰

慈母ため災後三月十八日　病没

昭和十八年十月十七週忌追善建立　西原光太郎

●与謝野町加悦町　加悦中学校東　丹後大震災

（碑文　原文）

震災供養塔

維持昭和二年三月七日午後六時二十八分奥丹大震災襲來當町之横死者迨三十七名茲建設此塔以永吊其靈矣

昭和八年三月建立

●与謝野町加悦町　旧加悦町役場庁舎　丹後大震災

（背景　与謝野町 HP から引用）

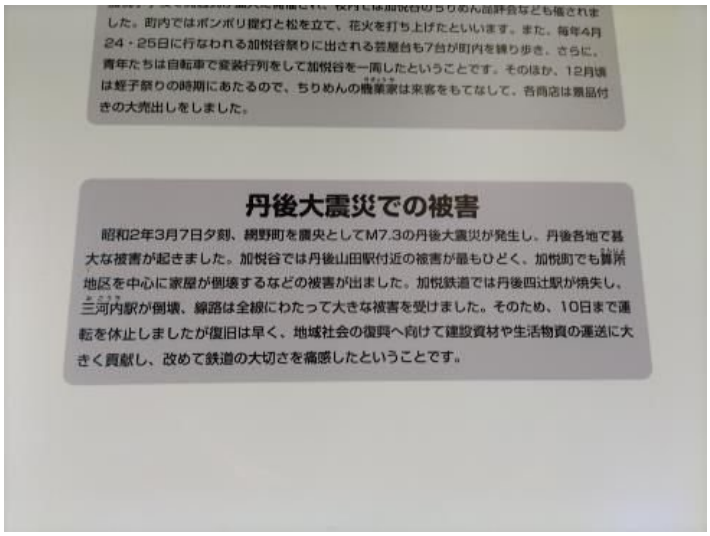
旧加悦町役場庁舎は、丹後大震災後に復興のシンボルとして昭和４年(1929)に完成。

設計は宮津出身で甲子園球場を設計した、当時大林組設計部長の今林彦太郎氏が担当し、洋風意匠で、当時の最新の耐震対策もなされた建物として、近代建築史上、貴重な遺構となっている。

現在もその名残を残したまま活用されている。

建築年月日　昭和 4 年(1929)7 月 20 日

●与謝野町加悦町　加悦鉄道　丹後大震災



（碑文　原文）

昭和 2 年(1927)3 月 7 日夕刻、網野町を震央として、M7.3 の大震災が発生し、丹後各地で甚大な被害が起きました。加悦谷では丹後山田駅付近の被害が最もひどく、加悦町でも算所地区を中心に家屋が倒壊するなどの被害が出ました。加悦鉄道ではし、丹後四辻駅が消失し、三河内駅が倒壊、線路は全線にわたって大きな被害を受けました。そのため、10 日まで運転を休止しましたが、復旧は早く地域社会の復興へ向けて建設資材や生活物資の運送に大きく貢献し、改めて鉄道の大切さを痛感したということです。

（碑文　背景）

加悦鉄道は、従業員 2 名の死亡などの被害を受けたが会社は被害の復旧を急ぎ、6 日後の 13 日には全線で運転を再開した。
この功績に対し加悦町より金 200 円を贈られた。

●与謝野町岩滝町　板列（いたなみ）神社　丹後大震災

（碑文　原文）

震災供養塔

昭和二年三月七日丹後有大震災死者数千人惨禍迄五十有八町村被害実一億金為由来我丹後誇和平無事郷無天変地妖臻如斯惨禍所振古来未曾有也此歳降殊多春将関而積雪数尺寒威料峭此日朝来偶風温雪休戸々終業団欒就晩餐忽焉聴遠雷人々驚異語末畢大震疑是天地飜覆山崩石飛地裂水迂大小家屋一斉倒壊実不過一瞬也親不遑顧子々無由救親棟撃架圧者不知幾百人燈滅夜闇火災各所起喚親者索子者求救者号泣者断腸之声満四辺噫何其惨采、我区死者実七十二人傷者無数家屋全壊百九十六全焼三十八而其余幾百家屋無一全者損害無慮達百五十万金焉噫震禍之惨一何如斬也呼、抑家屋壊滅尚可忍矣得復之也百五十万損害又可忍得償之也然而独至死者則否痛恨何堪頃来存外岩滝人相謀為死者建碑欲以修其冥福英魂亦長可以暝矣依記

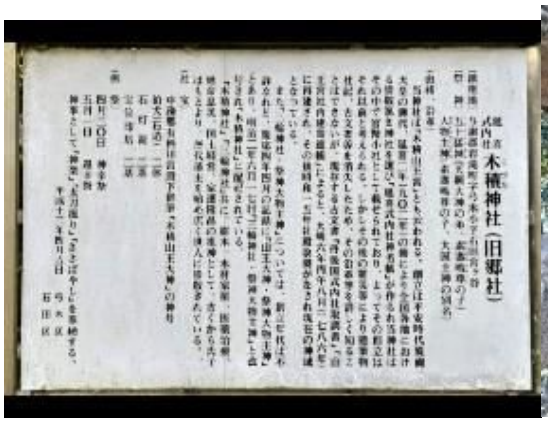
昭和四年三月七日　小室利吉撰

●与謝野町岩滝町　男山板列（いたなみ）八幡神社　丹後大震災

（碑文　原文）

昭和二年三月七日　震災記念

●与謝野町岩滝町　木積神社　丹後大震災



（碑文　原文）

昭和二年三月七日　震災記念碑

●与謝野町岩滝町　弓木墓地　丹後大震災

（碑文　原文）

震災供養塔　昭和二年三月七日

●京都市　東山区　京都女子大学　室戸台風(学校内)

（碑文　背景）

室戸台風は、大阪の豊津尋常小学校にも大きな被害をもたらした。ここでは校舎が倒壊し、京都女子大学の前身である京都女子高等専門学校の卒業生・横山仁和子先生が二人の児童を腕の中に抱きしめたまま犠牲になった。

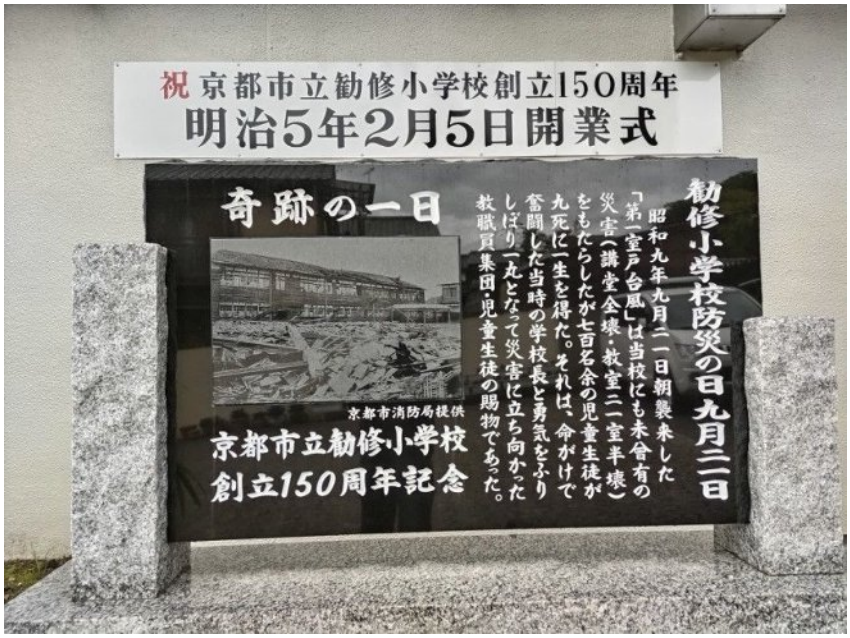
その両腕の中には元気な子供たちの姿がある。

9 月に着任したばかりの 25 歳の娘さんであった。

京都女子大学のキャンパス内に、建学の精神を体現した人間像ということで、

「師弟愛の像」とよばれる横山先生のモニュメントが建っている。
同じく豊津尋常小学校では吉岡藤子先生も犠牲になった。
瓦礫の下から教え子六人をかばった先生の姿が見つかった。
子供たちは奇跡的に全員無事であった。
吉岡先生は山口県宇部市の出身で 29 歳、七歳の一人娘を残しての殉職であった。
『ああ吉岡訓導』というタイトルで浪曲にもなり、菊池まどかさんがそのひととなりを伝えてくれている。

●京都市　山科区　勧修小学校　室戸台風（学校内）



⇑京都市消防局 HP から引用

（碑文　背景　山科区社会福祉協議会 HP から引用）

鏡山次郎先生の講演会

「勧修小学校　奇跡の一日　1934　0921　その時　何が⁉　700 名の命は　こうして救われた！」

が開催された。

昭和 9 年（1934）9 月 21 日に襲来した「第一室戸台風」は、山科にも大きな被害をもたらしたが、勧修小学校では、校長の時機を逸しない正確な決断と、それを迅速に遂行した教職員集団の力が、700 名の児童の命を救ったという歴史があった。

鏡山次郎先生は、犠牲者が出てしまった災害には慰霊と風災を伝承する記念碑はもちろん不可欠であるが、犠牲者を出さなかったことについても、風災を伝承する記念碑が必要ではないか、と話されたことが印象的であった。

当時は小学生で、実際に学校での避難行動を経験された 92 歳の方々からのお話もあり、大変貴重な機会であった。

●京都市　伏見区　桃山高等学校　室戸台風（学校内）

（碑文　背景）
昭和九年九月二十一日　風災記念碑
元京都府立桃山中学校（現桃山高等学校）の室戸台風による風災を記念するために設けられた慰霊碑。
同校では，第 2 教館（18 教室）と国旗掲揚塔が倒壊。
しかし，訓練された生徒は的確に避難し 1000 名いた生徒教職員は 1 名も死傷せずに無事であった。
この話を当時入洛した文部大臣が賞賛。
国旗掲揚塔ほかを関係者の努力で再建したことを後世に伝えようと記念碑を建立。
高さ約 2.7 メートルの石碑の背面には、559 文字の漢字とカタカナがびっしりと刻み込まれている。
碑文は、当時の桃山中学校の校長が記したとされる。
「我が校の永久に忘れてはならない日である」という書き出しから始まり、「台風の強風で校舎の 18 教室が全壊したが、犠牲者は一人もいなかった」と伝える。

●京都市　南区　大藪小学校　室戸台風（学校内）

（碑文　原文）

慰霊塔

大藪校罹災児童

五名の各霊

昭和九年九月廿十一日近畿颱風の折大藪小学校にて圧死す

昭和三十二年九月建立

●京都市　伏見区　向島小学校　室戸台風（学校内）

（碑文　原文）

風災記念（荒木実）

殉職平井ノブ・中埜テル両訓導、遭難児童 14 名の氏名

昭和 33 年 9 月 21 日再刻

※石碑画像は公開不可のために不掲載

●京都市　右京区　西院小学校　室戸台風（学校内）

（碑文　原文）
風災害記念碑
殉職訓導　松浦壽惠子先生
殉難児童　一学年三十二名
西院校

昭和九年九月二十一日　朝
室戸崎台風
教舎為倒壊

（碑文　背景）
室戸台風は、朝の 8 時頃に関西に上陸したため、登校してきた児童たちが犠牲になった。
淳和尋常小学校は、現在の西院小学校にあたる。
もともとは京都西郊の葛野郡西院村にあり、西院校として開校。
昭和 6 年(1931)、京都市に編入され、まもなく淳和尋常小学校と改称された。
これは、いにしえ、この地に淳和上皇の居所（後院）があったため。
台風当日の淳和小学校では、朝、校長から「風雨に注意するように」という訓示があったが、近くの春日神社の杉木立が折れたり倒れたりし始めた。
すぐに講堂に避難するよう指示が出たが、校舎が倒壊し、32 名の児童と 1 名の訓導が亡くなった。

※「由来」としての説明書が設置されており、児童にも理解しやすい。
　般若心経の写経が地下に奉納されている。

●京都市　左京区　養正小学校　室戸台風（学校内）

（碑文　背景　養正小学校 HP から引用加筆）

室戸台風に近畿地方は襲われ，当時の養正高等尋常小学校も木造校舎の教室のうち、全壊 4、半壊 3、傾斜 4、要修理教室 15、屋内体操場の屋根が大破などの記録が残っている。

児童は一人のけがもなく無事だった。

また、「学区民ノ絶大ナル一致協力ニ依り直チニ・・・」とされ、学校のためすぐに地域の皆様のご協力があり、教室の修理などがなされた。

●京都市　伏見区　下鳥羽小学校　室戸台風（学校内）

京都市立
下鳥羽小学校
Shimotoba Elementary School

（碑文　原文）

風災殉難碑

伯爵清浦金吾　書　（児童 20 名の氏名も記載）

昭和十年九月建立

昭和九年九月二十一日午前九時頃突然におそった大風（第一室戸台風）のため校舎が倒れいたいけな低学年児童が下敷きとなり死者二十名重軽傷者七十九名を出す大惨事があった

その場所は是より北東二百五十米校舎中央北側廊下であった後近くに殉難碑が建てられたが、学校移転に伴いこの地に移す

昭和五十一年十一月一日

※教頭先生からの説明では、「平成 25 年(2013)9 月の台風 18 号による鴨川左岸堤防での漏水、一部での越水により体育館が浸水し、体育館を新しく建て替えました」とのことであった。

現地付近の工事看板にも、この台風の被害について記載されている。

この看板の表記そのものも、近年の災害ではあるが、自然災害を伝承するものであろう。

○京都市　東山区　知恩院南　室戸台風（その他）

（碑文　要約）

昭和9年(1934)9月21日､西日本一帯に猛威を振るった室戸台風の暴風により、京都市及びその周辺において数校の木造校舎が倒れ、その下敷きとなって児童162名、教員4名の命が奪われた。この像は戦後に再建されたものである。

（碑文　背景）

昭和9年（1934）9月21日、関西地方を猛烈な台風が襲った。

最低気圧は911ヘクトパスカル、瞬間最大風速60メートル、死者・行方不明者は3037名にのぼった。特に風が強い台風で、気象台の風速計が振り切れたという話もある。

大きな爪痕を残したが、最も胸を痛めるのは数多くの小学校に被害が及んだこと。

台風の翌年、京都市がまとめた『京都市風害誌』によると、13の小学校で校舎が倒壊し、35の小学校で大破などにより校舎が使用不能になった。

また、京都市内だけでも、112名の児童、3名の訓導が尊い命を落とした。

室戸台風は、朝の8時頃に関西に上陸したため、登校してきた児童たちが犠牲になった。最も大きな被害が出たのは、西陣尋常小学校。

1時間目の授業が始まった頃だったので､521名の児童が倒壊していた校舎の下敷きになり、41名の児童が亡くなった。

それについで市内で大きな被害にあったのは、淳和（じゅんな）尋常小学校。この小学校は、現在の西院小学校。

もともとは京都西郊の葛野（かどの）郡西院（さいいん）村にあり、西院校として開校。昭和6年（1931)、京都市に編入され、まもなく淳和尋常小学校と改称された。これは、いにしえ、この地に淳和上皇の居所（後院）があったため（これが「西院」という地名の由来)。

台風当日の淳和小学校では、朝、校長から「風雨に注意するように」という訓示があったが、近くの春日神社の杉木立が折れたり倒れたりし始めた。
すぐに講堂に避難するよう指示が出たが、校舎が倒壊し、32 名の児童と 1 名の訓導が亡くなった。
これ以外にも、下鳥羽、向島、大内第三の各校で児童が亡くなり、向島では訓導 2 名が落命した。
京都市内で亡くなった訓導は 3 名で、淳和小学校の松浦壽恵子訓導と、向島小学校の平井ノブ訓導、仲埜テル訓導。松浦訓導を悼む像が、知恩院の南に立っている。
歌人・吉井勇の歌
「かく大き愛のすがたをいまだ見ず　この群像に涙しながる」
が前面のプレートに記されている。
当時松浦訓導は 30 歳で、1 年生の担任。当日の模様は、京都府が刊行した『甲戌暴風水害誌』には、次のように書かれている。
「俄に校舎がメリメリと鳴る。何か目に見えぬ強い威力が急に身辺を圧する。そこへ田中訓導が山田校長の命令を伝へ、「危険だからすぐ講堂に避難せよ。」と呼んで廻った。松浦訓導は早速児童を廊下に出させ、講堂の方へ向って前進を急がせ、自分も共に随いて行つたが、ふと、逃げ遅れた児童が教室に残ってゐないであらうかと思つたので、再び教室の方へ引き返さうとした其の刹那である。壁土はバタバタと白煙を吐いてあたりは濛々となり、天地も崩れんばかりの轟然たる音響と共に校舎は倒壊した。松浦訓導は倒れ来る校舎の柱を右手で支へるやうにして、「あぶないから早く、早く。」と連呼して一生懸命に児童を指揮督励しつゝ遂に逃げ遅れた数十の児童と共にその下敷となってしまつた。」
柱の下から救出された松浦訓導は、頭に傷を負って亡くなった。
しかし、その胸にはひとりの児童を抱きしめていて、その女の子は少しの怪我もなく助かった。
女の子の父親は、運ばれていく松浦訓導の姿を見て「お前は先生のお蔭で助かったのだ。なぜ先生と一緒に死ななんだ」と涙ぐみ、合掌した。
当時、市内の小学校の校舎は、徐々に鉄筋コンクリート化が進んでいた。
しかし、市内全域の木造校舎率は高く、約 8 割が未だ木造校舎であった。とりわけ、昭和 6 年（1931）に京都市に編入された新市域には、木造校舎が多かったと言い、倒壊校舎の多くは周辺部の小学校であった。一方、鉄筋校舎は無事で、校舎によって明暗が分かれるという痛ましい事態になった。
室戸台風後、昭和 14 年（1939）にかけて、京都市内の小学校では校舎の鉄筋化が進められていった。

●京都市　右京区　高山寺　室戸台風（その他）

（碑文　要約）

風災慰霊塔

風災惨死霊慰

（碑文　背景）

淳和（じゅんな）尋常小学校は、現在の西院小学校にあたる。もともとは京都西

郊の葛野郡西院村にあり、西院校として開校。
昭和 6 年(1931)、京都市に編入され、まもなく淳和尋常小学校と改称された。これは、いにしえ、この地に淳和上皇の居所（後院）があったためで、これが「西院」という地名の由来となっている。
台風当日の淳和小学校では、朝、校長から「風雨に注意するように」という訓示があったが、近くの春日神社の杉木立が折れたり倒れたりし始め、すぐに講堂に避難するよう指示が出たが、校舎が倒壊し、32 名の児童と 1 名の訓導が亡くなった。

●京都市　東山区　大谷本廟　室戸台風（その他）

（碑文　背景）

昭和 9 年（1934）9 月 21 日早朝に四国に上陸した室戸台風は、京阪神に大きな打撃を与えた。大阪府豊能郡豊津尋常高等小学校も、木造 2 階建ての校舎が倒壊し、51 人の生徒と 2 人の女性教師が死亡する惨事となった。死亡した女性教師のひとり横山仁和子先生は、3 人の学童を身体の下にかばい自らの命と引き替えに守った。

翌年 9 月 21 日に室戸台風の犠牲者を悼んで大谷本廟で一周忌の追悼法要が営まれ、あわせて「関西風水害罹災学童碑」の除幕式が行われた。

この碑は、日曜学校関係者を中心に基金を募って建立された。

●京都市　上京区　妙蓮寺　室戸台風（その他）

倒壊した西陣尋常小学校　（「上方」46 号所収）

⇑　中央に「埋没四十一児童」とある

⇑　7 院の名を刻む

（碑文　背景）

京都市内で大きな被害を出した小学校が、西陣尋常小学校。西陣尋常小学校では、1 時間目の授業が始まった午前 8 時半頃、暴風によって 2 階建の木造校舎が倒壊し、1 階にいた児童 521 名と職員 10 名が下敷きになった。3 時間かけて全員を救出したが、41 名の児童が亡くなった。

京都市内では、小学校で多大の被害が出、112 名の児童と 3 名の訓導が亡くなり、私立両洋中学校でも 20 名の犠牲者を出した。
西陣小学校から 3 筋ほど上がった寺之内通大宮東入ルに妙蓮寺があり、本門法華宗の古刹で、中世以降、京都に大きな勢力を張った法華宗発展の礎となった寺院である。この妙蓮寺の山内東北隅に墓地がある。
この墓域の正面に、室戸台風で亡くなった児童たちを供養した慰霊塔が建っている。
表面の題額は「慰霊塔」。
妙蓮寺の住職である大僧正・福原日事の揮毫。
その下には「西陣校罹災児童」とあって、亡くなった 41 名の氏名が刻まれている。
妙蓮寺にこの慰霊塔が建てられているのか。その理由は、塔の裏面に記されている。裏面の碑文は「昭和九年九月廿一日　突如天譴暴風水襲近畿関西之地」から始まる。
「殊西陣校惨禍最留憐」として、暴風が西陣小学校の校舎を瞬時に倒壊させ、41 名の児童の命を奪ったことを記している。
台風の翌日、遺族の有志により、妙蓮寺の住持を招いて学区葬が営まれ、寺内に分骨を納めたと伝えられている。
その後、同寺塔頭・本光院の僧・宮宇地日演の発起によって慰霊塔の建設が提唱され、他の 6 院も賛同し、建立が進められた。宮宇地日演は後に妙蓮寺の住職も務めている。
碑文は長いが、台風の翌日に妙蓮寺で学区として供養が行われ、それが契機となって慰霊塔の建立につながったことがわかる。
台風後、西陣小学校では建設中だった鉄筋コンクリート造の校舎が竣工した。

〇八幡市　善法律寺　室戸台風（その他）

（碑文　原文）

慰霊塔

昭和九年九月二十一日早旦未曾有ノ颱風襲来シ関西ノ天地震駭ス　此一瞬我八幡校大校舎モ忽チ崩壊黄煙茫々散シ盡セハ　校長訓導茲ニ可憐ノ学童三十有二名ノ痛マシキ犠牲アリ　嗚呼鬼哭啾々天人倶ニ泣ク　我等町民断腸ノ懐ニ禁ヘス　茲ニ相議シ以テ慰霊塔ヲ建立シ永ク其ノ冥福を祈ラントス

昭和十年九月二十一日　　八幡町長　河原崎文二誌之

（碑文　要約）
昭和 9 年（1934）9 月 21 日、かつてない規模の台風（室戸台風）の強風により、八幡尋常高等小学校の校舎のうち 12 教室 2 棟が倒壊、5 教室が半壊した結果、教員及び児童 34 名の命が奪われた。

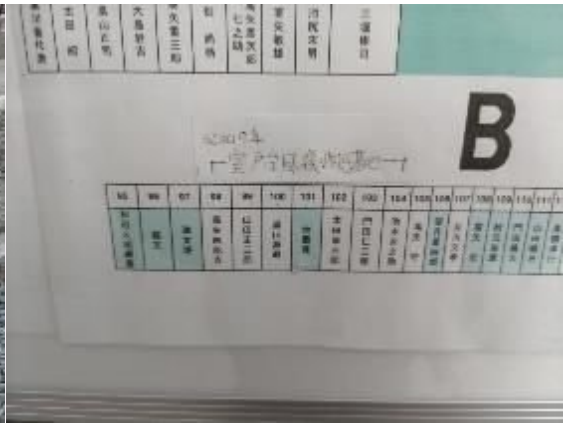
（碑文　背景）
被害、慰霊碑の建立までの経過などは、『八幡市誌　第三巻』の第４章に多くの文字数を費やして記録されており、以下にその一部を抜粋する。
〇昭和 9 年（1934）9 月 21 日朝６時。
台風は高知県の室戸岬をかすめて紀伊水道に入り、大阪湾から淀川沿いに時速 60 キロメートルで京都府を通過し、滋賀・富山県下を抜けて日本海へと通り過ぎた。
〇近畿を直撃し、特に京都府南部に多大の被害をもたらした。
被害の中でも悲劇的であったことは、多くの小中学校が倒壊し、児童・生徒に多数の死傷者が出たことである。
〇八幡での学校被害は、当時の八幡尋常高等小学校（明治 33 年 10 月設立）、有智郷尋常高等小学校および都々城尋常高等小学校（共に明治 41 年 4 月設立）などで死者を含む多くの人的な被害や建造物への被害が発生した。
〇9 月 23 日、八幡尋常高等小学校にて遭難児童死亡者の八幡町葬が、翌 10 月 25 日には京都府主催の遭難者慰霊祭が府立植物園内にて執り行われた。
〇翌昭和 10 年（1935）10 月、後の管理を当時の町が責任を持って行うことを条件に善法律寺の境内に慰霊碑を建立することが議決され、昭和 11 年（1936）9 月、碑の建立を見る。
なお、「後の管理を町が責任をもって行う」に沿い、今でも遭難日には毎年八幡小学校の児童による清掃とともに、慰霊祭が行われている。
〇慰霊碑の上のお地蔵様は、子守地蔵尊と呼ばれている。

●京都市　東山区　大谷本廟二天門　室戸台風（その他）

（碑文　原文）
二天門者聚楽第之遺物也慶応三年
罹祝融之災焼失明治五年
三月再造昭和九年大風又倒壊
于茲大阪市住吉区橋本町山本
健次良■重蔵佐久両人之遺命
寄懇志欲復旧観乃昭和十二年
八月鳩工同年十一月告成

（碑文　要約）
大谷本廟の二天門は慶応 3 年に焼失し明治 5 年に再建されたが，昭和 9 年の室戸台風で倒壊した。信徒の寄進により昭和 12 年に再建工事が完了した。

●京都市　伏見区　向島西堤共同墓地　室戸台風（その他）



（碑文　原文）

碑文塔

昭和九年廿一日、第一室戸台風により向島小学校々舎倒壊による犠牲児童の冥福を祈り建之

庚申町畠山優佐男君　中之町池本当男君

庚申町太田幸男君　津田町高矢武男君

橋詰町門田正男君　二の丸町山田音次郎君

昭和四十五年九月廿一日

向島共同墓地管理委員会

●京都市　上京区　西陣小学校（廃校）　室戸台風（その他）

⇑　公園との境に「西陣校」と記載の瓦が置かれている

（碑文　原文）
昭和九年九月二十一日　記念碑

※石碑画像は公開同意必要のために不掲載

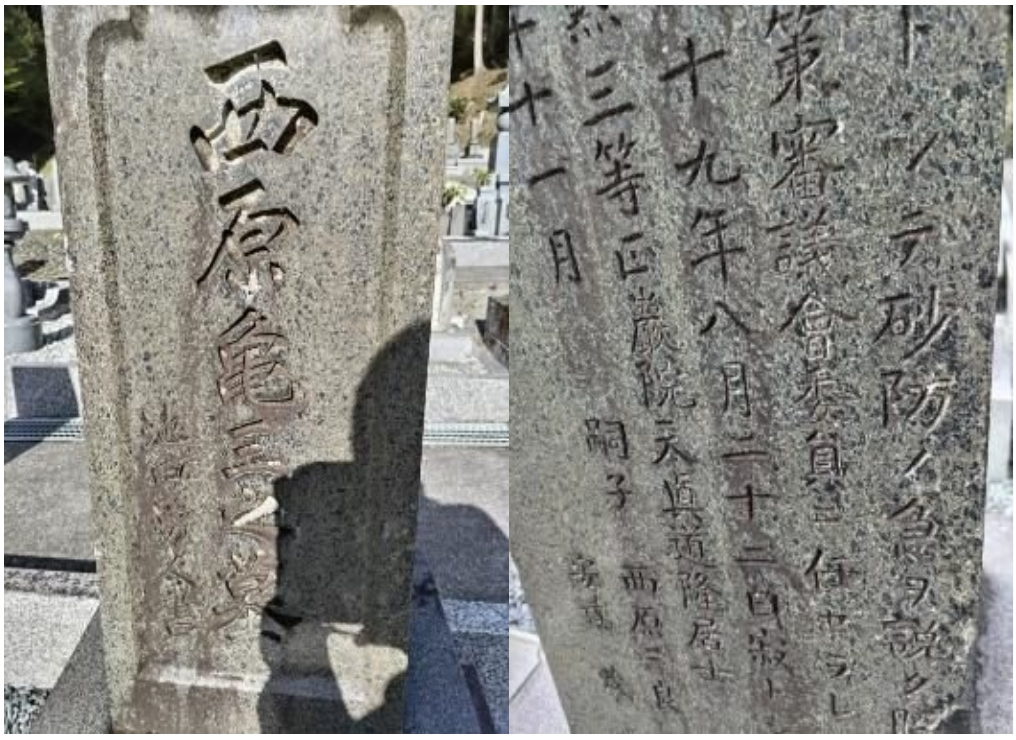
（碑文　背景　京都新聞から引用）
「先生助けて」台風で校舎倒壊、今も耳に残る叫び声
　98 歳の女性が室戸台風を証言　令和 3 年(2021)9 月 21 日
「お母さん、助けて。先生、助けて。そんな声が 80 年以上たった今でも耳に残っています」。当時「観測史上最強・最大」といわれた室戸台風が京都市を襲った。木造校舎の多かった市内では、小学校の校舎が倒壊し、幼い子どもたちの命が失われた。自身も校舎の下敷きになり生還した 98 歳の女性は、当時の惨状を今も鮮明に記憶する。女性の証言を元に、室戸台風の被害を振り返る。
当時は西陣小の 5 年だった。9 月 21 日、少しきつい風の中、傘をすぼめながら登校した。
「あのころは『学校を休ませてはいけない』という風潮がありました。欠席するなんていう考えはありませんでした」
台風は 21 日午前 5 時に高知県の室戸岬を通過、大阪湾へと進んだ。気象庁ＨＰによると、室戸岬では最低気圧 911.6 ヘクトパスカルを観測。猛烈な力を保ったまま、台風は午前 8 時半ごろ京都市へと到達した。京都市が室戸台風の被

害をまとめた「京都市風害誌」によると、最大瞬間風速は 42 メートルに及んだ。
登校後、2 階にあった 5 年の女子教室から窓の外に目をやった。
「瓦が飛んでいく様子が見えたんです。先生からの指示で、窓側に机や椅子を集め、子どもたちは窓と反対側に固まるように言われました」。
その直後だった。
「南側にあった教室の窓ガラスが一斉に割れました。慌てて廊下へ出ました」。外へ駆けだそうとした。しかし、次の瞬間、木造２階建ての校舎は強い風にあおられ倒壊してしまった。しばらく意識を失っていたようだった。気がつくと、体は校舎の下敷きに。頭上のがれきの隙間から空が見えた。耳には下敷きになった子どもたちの悲痛な叫び声が届いた。
「『お母さん、助けて』『痛い』『先生』と泣き叫ぶんです」
少したつと上からミシミシという音とともに、「助けるからしっかりせえよ」「もうちょっとや。がんばれ」という声が聞こえてきた。近所の人たちが救出に駆けつけていた。男性に助け出された。幸いにも大きなけがはなかった。
「家に帰れるか」と聞かれ、「うん」と答えると自力で約 250 メートル離れた家を目指し歩き出した。はだしでの帰宅途中、学校近くの商家が救護所になっているのを見掛けた。軒先にはけがをした子どもたちが多く寝かされていた。4 年の弟さん（故人）と 3 年の妹さん（96）がいた。弟さんは、校舎倒壊時に下敷きにならず、外に投げ出され自力で帰宅した。しかし、教室が１階にあったため、長時間生き埋めになった。「妹は（倒壊から 6 時間以上経過した）午後 3 時ごろになって足を包帯でぐるぐる巻きにして帰ってきました」。きょうだい 3 人とも、けがを負いながらも命は助かった。「柱１本で生死が分かれるんです」。妹の同級生で近所の幼なじみは、救出されるまで時間がかかった。「幼馴染のお母さんは地べたに手を付いて『うちの子を助けて』と叫んでいたそうです」。ようやく救出されものの、病院へと搬送される自動車の中で亡くなったという。「妹によると下敷きになった後、しばらく意識はありました。でも助からなかった。後に幼馴染のお母さんは『なんであなた方は３人とも助かったのに、一人っ子のうちは…』と話していたそうです。かわいいお嬢さんだったのに」
西陣小の歴史を記した「閉校記念誌　西陣」によると、児童・職員約 500 人が下敷きとなり、41 人の児童が亡くなった。
41 の小さなひつぎは、郊外にある蓮華谷火葬場で荼毘に付された。
「夜中なのに、『遺体を焼いてくれ』という親御さんが来られました。聞くと、ほかの小学校で亡くなったお子さんの家族だったそうです。順番待ちの列に入れてあげた、と父は振り返っておりました」

校舎倒壊は西陣小だけではなかった。京都市内の小学校だけで淳和（現西院）、下鳥羽、向島など 13 校を数え、児童計 112 人が犠牲となった。
室戸台風は関西全域でも大きな爪痕を残し、大阪市では高潮により広範囲が浸水した。
滋賀県では瀬田川の鉄橋上を走行していた急行列車が強風にあおられて横転した。気象庁ＨＰによると、全国で死者・行方不明者は 3000 人余りに達した。
１年後の昭和 10 年(1935)9 月 20 日、知恩院（東山区）に犠牲児童・職員を悼む「風災学童慰霊塔」が建立された。
建立に合わせて行われた式典に、西陣小の代表の一人として出席した。その式典で披露するため、学校で覚えた歌を今でもそらんじる。
「いくら泣いても泣き足らぬ　悲しい夢の日が続く　わたくしたちは小さくてまだ世の中に生きてゆく」
西陣小の敷地内に「風害記念碑」、近くの妙蓮寺の境内には「西陣校罹災児童慰霊塔」が建てられている。
「今でも台風が来るというと、進路予想図に物差しを当てて京都に来るかどうか見ている。台風はいつまでたっても怖い」と語る。
西陣小は、児童数が減少したため平成 7 年(1995)に閉校した。41 人の児童が亡くなった歴史的事実を知る人も少なくなっている。
「亡くなった子が、今でもかわいそうで　かわいそうで」。
悲劇の記憶と追悼の継承を願っている。

●福知山市　雲原　雲原砂防　室戸台風（その他）

雲原砂防公園
Kumohara-sabo Park



⇑龍雲寺内の西原亀三村長のお墓（池田勇人の書）

（碑文　要約）

我が雲原村は、山々に囲まれた谷深く、昔から今日まで再三にわたって水害を受けてきた。昭和 19(1944)9 月 21 日に台風がまたも関西を襲うと、山は崩れ谷は埋まり、橋梁は流され、田畑は耕土を流されるなど、今まで経験したことのない大変いたましい災害となり、村民はそろって、私に村長として復旧に当たるよう依頼した。私は、土木の法律規則に基づいて原形復旧した土木当局の設計施設をよく見たが、もとへ戻すだけでは何度も被害を被り、国が度重なる対応に振り回される原因と考え、このことについて土木局広瀬久忠君に正すよう要請し、内務省技師赤木正雄君に現地をつぶさに調べ、水害を防ぐには水源部に砂防施設を設けることが先だとの考えを示された。砂防法が明治 31 年(1898)に公布された。

この法律が存在するものの、砂防費が無く、多額の費用を捻出する手だてがなかった。そのため砂田重政君と膝を交えて話し合い、第二予備費を活用する計画を提案し、高橋是清大蔵大臣に対して実情を話し援助を訴えたところ、大臣は申し出を理解し快く引き受け、決断を渋る地方長官を更迭してまでも、金 135 万円を京都、兵庫、岡山、鳥取、島根の 5 府県に支出することを決断された。これにより本村の砂防施設に着手する事が出来た。この取り組みは全国の砂防工事の手本となるものである。本村はこの事業とともに、更に非能率的な農村の仕事をあらため、合理的機構の農村再組織を企画し、農地の交換、農家移転を断行し、引き続き農地改良事業を推し進めている途上である。

顧みれば、昭和 10(1935)8 月に起工してから数えること 20 年、所要総工費金 2 億 6 千万円を要するに至った。この間、終始一貫して赤木技師の熱心な指導と府当局の長嶺技師の努力と村民の協力により大事業が完成できた。これはひとえに高橋大臣の英断によってなしえた国づくりの基本となるものである。　私は政治に携わる者の先見性を思い起こし感慨にたえず、ここに本村治水の業績を彫刻して後生に贈るものなり。

昭和 27 年 8 月 15 日　　天田群雲原村　西原亀三

（碑文　背景）

雲原砂防関連施設群は、福知山市北部の山間部に所在する。

当時の雲原村は度重なる水害で農地は荒廃し、収穫量も減少して村民は過酷な生活を送らざるを得なかった。

特に昭和 9 年(1934)の室戸台風による被害は大きく、翌年雲原村長に就いた西原亀三は、復旧工事でなく抜本的な治水工事を望み、内務省技師であった赤木正雄に施設工事計画を要請するとともに、大蔵大臣であった高橋是清に砂防工事の必要性を説き、事業予算として認められた。

これにより、赤木正雄の理想的なモデル工事計画が行われ、複数の流域（総延長約 12ｋｍ）にわたって堰堤 11 基、床固工 157 基、流路工 41 基が構造的連続性を持って配置され、一体的な機能を有する砂防施設が造られた。

また、土砂災害に対する安全性を確保するため、徹底的・理想的な砂防工事を目指し、農地改良・用排水路改修・林地改修・集団耕地造成・農家移転を組み合わせた総合的な地域整備事業が行われた。その結果、水害抑制の効果が得られ、かつ大規模な換地・分合により耕作地が増えるなど農業振興に寄与することとなり、雲原地区の発展に大きく寄与することとなった。

施設群は、現在に至るまでその役割を維持している。

このように、雲原砂防関連施設群は、昭和 10 年代の我が国農村復興の様相を具体的に示すものであり、歴史的な価値を有していることから、登録する。

●京都市　南区　鳥羽地蔵　室戸台風（その他）

（碑文　原文）

風害復興記念

昭和九年度大風害ヲ被シ庫裏地蔵堂再建ヲ完成ス

昭和十四年九月十日落慶建立

〇京都市　上京区　上立売通　昭和 10 年水害

（碑文　要約）

昭和 10 年(1935)6 月 29 日未明、数日来降り続いた豪雨のため、京都市内を貫流する河川はすべて氾濫し、4 万戸以上の市内家屋が浸水の被害を受けた。上京区小川学区では、29 日午前 5 時に上立売小川の石橋が落ち、小川に面する家屋は倒壊流失または半壊した。

碑には「大出水地上四尺」とあり、約 1.2m の浸水があったことがわかる。

なお，この碑はもと現在地の向い側にあり堀之上町域に属していたが，のち現在地に移建された。

●京都市　北区　御薗橋下流左岸の集落地　昭和 10 年水害

（碑文　原文）

昭和十一年六月廿九日建立　水害紀年

河原町公同組合

●亀岡市　鵜ノ川左岸堤防　改良記念碑　昭和 10 年水害

（碑文　原文）

鵜ノ川ハ、山城國大原野村小塩山淳和帝陵ノ聖域ニ發シ、丹波國篠村ニテ桂川ニ注ク流程六粁流域十二粁平方粁ノ小河川ナリト雖モ概ネ急峻ナル渓谷ヲ奔リ下流ニ於テ纔ニ耕地ヲ展クノミ迂曲甚シク河積狭小ニシテ古来降雨毎ニ沿岸ノ被害絶ユルコト無シ此ノ故ニ明治四十年四月砂防指定地ニ編入セラレ爾来山腹及渓流ノ砂防施設ニ十三萬餘圓ノ巨費ヲ投シ専ラ災厄ノ防止ニ努メタルモ昭和十季六月及八月京都地方ヲ襲ヒタル稀有ノ豪雨ハ、一瞬ニシテ護岸ヲ毀チ堤防ヲ破リ橋梁ヲ流出シ耕地ヲ荒廃セシムル等未曾有ノ暴威ヲ振ヒ其ノ復旧費十三萬九千餘圓ニ達セリ玆ニ於テ京都府ハ此ノ復旧費ヲ以テ本川ノ根本的改良計畫ヲ樹立シ昭和十一年十一月起工シ本季五月其ノ工ヲ竣ウ幅ヲ廣ゲ岸ヲ固メ流路ヲ整斉シ又堰堤ヲ設ケテ水流ヲ緩和シ灌漑ニ便セシム今ヤ舊態全ク改マリ沿岸ノ庶民ハ水禍ヲ免レ其ノ恵ニ倚托スベク仰キ望ム大原野陵ノ翠岳ト共ニ永ヘニ沿岸ヲ裨益シテ淪ルコトナカラン　即チ篠村村民欣喜シテ沿革ヲ碑ニ刻シ後昆ニ貽ス

昭和十三季六月　焉建

※「京都府土木部長　岩崎雄治書」と記載されており、当時は京都府には「土木部」という名前の組織があったことがわかる。（現在は、「建設交通部」）

●京都市　東山区　三条大橋　昭和 10 年水害

（碑文　原文）

三条大橋は明治四十五年三條通拡張のとき幅員を倍加して一四、五米に、橋長は一〇一米に、橋脚はコンクリート造としたが橋面は従来の風格をもつ木造橋であつた

たまたま昭和十年六月の洪水にあい橋の一部と擬宝珠一個を流失　この水害に鑑み鴨川を改修し、河底を深くしたので、天正以来の敷石、礎石は取除かれた、重ねて今回この橋の修築に際し、橋を鴨川と疏水の二部に分/け、橋長は鴨川部七四、〇三米疏水部一六、九七米、幅員はいづれも一五、五米とし、橋面構造もコンクリート床版としてかけかえ、この擬宝珠も新に追補した

昭和二十五年一月

京都市長　神戸正雄

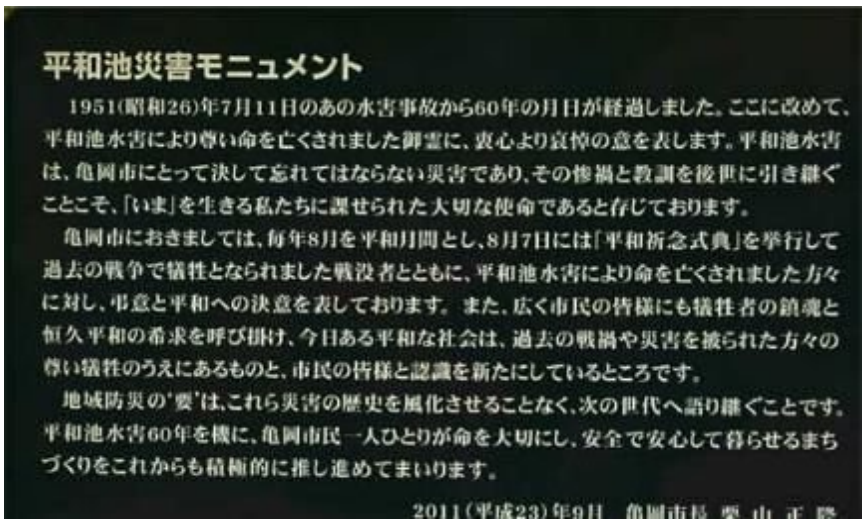
●京都市　下京区　松原橋　昭和 10 年水害

（碑文　要約）

現在架かる橋は、昭和 10 年（1935）鴨川の大洪水による倒壊流失後に架け替えられたものである。

京都市

○亀岡市　平和池ダム跡地　亀岡平和池水害



平和池災害モニュメント

1951(昭和26)年7月11日のあの水害事故から60年の月日が経過しました。ここに改めて、平和池水害により尊い命を亡くされました御霊に、衷心より哀悼の意を表します。平和池水害は、亀岡市にとって決して忘れてはならない災害であり、その惨禍と教訓を後世に引き継ぐことこそ、「いま」を生きる私たちに課せられた大切な使命であると存じております。

亀岡市におきましては、毎年8月を平和月間とし、8月7日には「平和祈念式典」を挙行して過去の戦争で犠牲となられました戦没者とともに、平和池水害により命を亡くされました方々に対し、弔意と平和への決意を表しております。また、広く市民の皆様にも犠牲者の鎮魂と恒久平和の希求を呼び掛け、今日ある平和な社会は、過去の戦禍や災害を被られた方々の尊い犠牲のうえにあるものと、市民の皆様と認識を新たにしているところです。

地域防災の'要'は、これら災害の歴史を風化させることなく、次の世代へ語り継ぐことです。平和池水害60年を機に、亀岡市民一人ひとりが命を大切にし、安全で安心して暮らせるまちづくりをこれからも積極的に推し進めてまいります。

2011(平成23)年9月　亀岡市長　栗山正登

(碑文　要約)

昭和 26 年（1951）7 月 11 日 9 時 40 分、集中豪雨で防水ため池である平和池ダムが決壊した。

亀岡市内では 114 名（柏原区 75 名、旧亀岡地区 21 名、その他地区 18 名）が亡くなり、家屋の流失・全半壊 268 戸、床上浸水 152 戸等、下流の篠町柏原地区を中心に多くの被害が発生した。

※地域では、以前から永く伝承活動が行われている。

〇亀岡市　篠町柏原　年谷川堤防　亀岡平和池水害

（碑文　要約）

昭和 26 年（1951）7 月 11 日未明からの豪雨により、年谷川が増水・氾濫する中、上流の平和池ダムが決壊した。

氾濫の濁流と決壊の鉄砲水が高さ 2m から 3m もの黒褐色の大波となって篠町柏原地区を襲い、美しかった街並みは一瞬にして泥海の底に沈み、死者 75 名、家屋の流失 30 戸、全壊 22 戸、耕地 30 ヘクタールが流失する被害となった。

○亀岡市　矢田天満宮　亀岡平和池水害

（碑文　要約）

昭和 26 年（1951）7 月 11 日、集中豪雨により防水ため池の平和池が決壊した。

年谷川に数メートルの小山のような濁流が轟音とともに押し寄せ、上矢田町内では死者 17 名、流失家屋 10 戸、耕地流失等の被害が生じた。

災害は忘れた頃に来るというので、この災害を次世代に伝えるため、この水害で流失した橋の石材を用いて碑を建立した。

○宇治田原町　郷之口　昭和 28 年災害

（碑文　原文）
昭和二十八年水害記念碑
京都府知事　蜷川虎三
水害記念碑之記
昭和廿八年八月十四日日没より降り始めたる雨は仝九時頃より雷鳴を加えて愈々激しく夜半十二時に至るや落雷閃光交錯し豪雨となりて物凄く危機刻々に近づけり出水の危険を報すと警鐘も雷鳴に阻まれて聞こえず交通々信は杜絶し電柱倒壊して全村闇黒となれりやがて三時三十分頃大字南東谷の溜池決壊續いて巨大なる東谷新池及び平ノ谷溜池次々に決壊し奔流は山津波となりて犬打川を下り沿川の人家瞬時に流失せり特に高橋の上流二百米附近の堤防決壊し奔流は府道郷之口加茂線上二米の水深となり矢の如く下り更にこの地一帯は田原川の奔流と合して濁流渦を巻き郷之口上町荒木贄田方面の人家浸水し家財道具を流失して古今未曾有の大災害となり全村の荒廃その極に達したり
爾来ここに三星霜當時の村長住田利夫氏議長田村興一氏副議長桝村信次氏災害復旧対策委員長矢野芳造氏等を中心とし村民一致団結廃墟より立ち上がり見事之を克服し更に旧来の面目を一新した仍って此度に記念の碑を建立し自然の暴威を克服せる全村民の偉業を後世に遺さんとす
昭和三十一年八月十五日　田原村長　谷口宗三郎

（碑文　背景　宇治田原町　町民の窓　令和 2 年(2020)9 月記事から引用）
【南山城水害・当時の惨状】
昭和 28 年（1953）8 月 14 日、夕方から降り始めた雨は夜にはますます激しくなり、午後 9 時頃には雷鳴も轟き、夜半の 12 時頃には風雨は更にその激しさを増し、雨音をかき消すような落雷の轟音は、人々を不安と恐怖に陥れた。
中心部を流れる犬打川・田原川も雨量とともに水かさを増し、道路は濁流の通り道となり交通はまったく不可能。
翌 8 月 15 日午前 3 時 30 分、犬打川上流のため池が決壊。続いて東谷新池、平

の谷池等が次々に決壊。
巻き起こされたすさまじい山津波は、川沿いの民家を容赦なく飲み込んでいった。
また、宇治田原村でも、禅定寺川、糠塚川等が決壊。奥山田地区では山崩れで一家 8 人が生き埋めになるなど、各所で大きな傷跡を残した。

※昭和 28 年当時、田原村と宇治田原村となっていたが、昭和 31 年に合併し、
　宇治田原町となった。

●井手町　玉水駅構内　昭和 28 年水害

⇑　駅舎改修後（ホームに入らなくても見ることができる）

⇑　駅舎改修前の状況

（碑文　原文）

水難記念

昭和二十八年八月十五日南山城水害。

それはこの町にとって忘れ難い悲運な記録である。前夜来の雨は時間雨量百五十ミリを超える稀有の集中豪雨となった。そして暗夜の中に猛り狂った水魔は町も人も一瞬のうちに躁躍。一夜明けた町は百七人の犠牲者を含む無惨な受難地獄であった。当駅も駅舎ホームは文字通り河原と化したが、この石(6 トン)は東南約五百メートル先の玉川から押し流されてきたものである。

昭和五十六年一月十五日建立玉水駅

※「集中豪雨」という言葉は、このとき朝日新聞の 1 日付夕刊で「集中豪雨、木津川上流に」という見出しで使われたのが最初。

家屋被災状況（綴喜郡井手町玉水地区）
京都府砂防協会発行の「京都府の昭和 28 年災害」から引用

●井手町　石垣区公民館　昭和 28 年水害

←慰霊塔付近の大雨時の玉川

（碑文　背景）

昭和 28 年(1953)8 月 14 日、夕刻頃から小雨であったが、22 時か 23 時より強雨となり、8 月 15 日に日付が変わった頃、雷鳴を伴う豪雨となった。午前 2 時半頃から才田川で最初の決壊、井手町においては低地での浸水が始まった。午前 3 時頃より玉川下流の右岸で、下流から順に越流・決壊が発生し始めた。そこへ、午前 4 時頃、上流にある農業用ため池（大正池・二の谷池）がほぼ同時に決壊し、山津波が発生。これにより玉川の上流でさらなる決壊が発生し、井手町は甚大な被害に見舞われることになった。

井手町玉水地区は木津川堤防、玉川堤防、谷川の堤防という 3 方を堤防で囲まれており、典型的な内水地区となっていた。そのため、ほかの被災地区では早期に排水が進んだのに対し、この地区は災害後数日たっても水位が下がらす、しかも行方不明者の多くがこの地に流れ着くという状況が発生していた。

●井手町　高神社　昭和 28 年水害

（碑文　原文）

記念碑

維時昭和二十八年八月十五日払暁未曾有の豪雨南山城一帯に降り當村内各河川は氾濫し道路堤防の決壊橋梁の流失家屋の浸水倒壊田畑の埋没山林の崩壊等算なく其の被災の甚大な事に村民は一時茫然自失されとも天の猛威に屈せず有らゆる困難を克服して挙村一致此等災害の復興を完遂す　特に當神社に於いては神橋流出に依り之を架設し燈籠の移轉を行い参道の改修に山崩の砂防を施行す茲に碑を建て以て記念す

昭和三十一年十一月　建立

高神社　宮司　宮崎愛太郎

〇南山城村　北大河原　昭和 28 年水害

（碑文　原文）

表面

**　復興　災害記念塔**

裏面

**　南山城水害記念碑**

昭和二十八年八月十四日日没より降り始めし雨は夜と共に益々勢を増し雷鳴天地を揺かし雨量刻々に増大し夜半に至りては稀有の大豪雨となり十五日未明山津波と激流は家屋を埋没流出せしめ一瞬にして幾多の尊き人命を奪い而も祖先傳来の田畑は砂礫の河原と化し道路は寸断され交通通信は全く杜絶し惨状人をして目を蔽はしむ實に本村未曾有の大災害たり爲に村民の生活は根底より覆され永年の平和郷も荒廃その極に達せり爾来三星霜能くその廢墟より立上がり営々苦心の結果復旧の功漸くその半ばに達せる今日茲に記念の碑を建立し災禍の惨状を記して後世に遺さんとす

昭和三十一年八月十五日建之

(碑文　要約)

昭和 28 年(1953)8 月 14 日の日没から 15 日未明にかけて集中豪雨が京都府南部南山城地方を襲った。豪雨は山津波を発生させ、土石流は家屋や田畑に襲いかかり、一瞬にして大災害をもたらすところとなった。この大水害によって、南山城一帯は犠牲者 336 名、流失・全壊家屋 752 戸を数えるとともに、田畑は砂礫の河原と化し、道路は寸断されるなど、未曾有の被害を受けたのである。

その後、全村が一丸となって復旧に邁進し、三年にしてその半ばを達した。そこで南山城村では、災害の記念日である昭和 31 年(1956)8 月 15 日に災禍の惨状を記して後世に残すため、この石碑を建立した。

○木津川市山城町　南綺田　昭和 28 年水害

（碑文　原文）

ないと思うな不時災難

昭和廿八年八月十五日未明南山城地方を襲った未曽有の大豪雨による天神川不動川の堤防は崩壊　田畑は砂礫泥濘の惨たる荒原に化す同年十月これが復旧に立ち住民不屈の協力により同世四年五月工事全く成る同年八月十五日にこれを立つ

耕地二七八反
水路七〇九五米
道路三二四七米

（碑文　要約）
昭和 28 年(1953)8 月 15 日未明、南山城地方を襲った前日からの集中豪雨により天神川、不動川など旧山城町の４つの天井川が決壊し、死者 32 名、負傷者 602 名という大災害が起こった。
とりわけ、天井川に囲まれた棚倉地域、高麗地域に被害が集中した。

※京都府の当時の土木工営所長の氏名「小出弘之」も刻まれている。

洪水被害状況　（木津川市山城町綺田地区）
京都府砂防協会発行の「京都府の昭和 28 年災害」から引用

〇木津川市山城町　北平尾　昭和 28 年水害

⇑　刻印付

⇑　石碑近くの鳴子川橋の親柱

（碑文　原文）

南山城　水害記念碑

昭和二十八年八月十五日未明発生せる南山城水害により死者二十四名流失家屋十九戸全かい家屋三十戸耕地四十七丁歩畑六丁八反歩が埋没或いは流失す棚倉村の被害總額十五億余円也

昭和三十年八月建立

(碑文　要約)

昭和 28 年(1953)8 月 15 日未明、南山城地方を襲った前日からの集中豪雨により旧山城町の４つの天井川が決壊し、死者 32 名、負傷者 602 名という大災害が起こった。とりわけ、天井川に囲まれた棚倉地域、高麗地域に被害が集中しており、棚倉地域では 24 名が死亡、家屋流出 19 戸全壊家屋 30 戸であった。

○木津川市山城町　北河原　昭和 28 年水害

⇑　刻印付

（碑文　原文）

水害記念碑

昭和二十八年八月十五日夜来の豪雨は閃光と雷鳴の中山を裂き未曽有の大洪水を引起こし狂奔する鳴子川水勢は区民必死の防御も及ばず遂に北河原橋に於いて堤防を決壊させ一瞬津波の様に人家を襲う時に午前四時濁流は多数の人と家を流し村民懸命の救助もはかなく荒れ狂う水魔は七名を不帰の客とし美田を砂浜と泥沼に化す以来区民一致協力苦難を克服して復興を見るに至る

ここに大水害十周年を迎えるに當り犠牲者の霊を捧げると共に有史以来の惨禍を後世に傳える　　昭和三十八年八月建　北河原区

（碑文　要約）

昭和 28 年(1953)8 月 15 日午前 4 時、南山城地方を襲った前日からの集中豪雨により鳴子川など旧山城町の 4 つの天井川が決壊し、死者 32 名、負傷者 602 名という大災害が起こった。とりわけ、天井川に囲まれた棚倉地域、高麗地域に被害が集中しており高麗地域の北河原区では 7 名が死亡した。

●井手町　宮本水車舊址　昭和 28 年水害

（碑文　背景）

宮本水車の里は橋本水車と称されていた。
江戸時代の文化年間に宮本三郎の息子の喜左衛門が分家して水車を造った。
明治初年に京都府が水車を利用する仕事（水車生業）の許可（官帖）を与えた。
その後、宮本家の人々がこの水車による搾油・精米・製粉を生業として従事し、里人の便宜をはかり、喜ばれるところとなった。
昭和 28 年(1953)8 月 15 日未明に山中の池が突如崩壊し、洪水を起こし、激流となり、一瞬にして水車も家屋も消失するという被害に遭う。
痛恨極まりなしとなる。昭和 28 年の水害が惨事をもたらした。
今は、水車に利用していた水路と石臼だけが、昔の繁栄を物語っている。
そこで、宮本家先祖の生業を偲び、この碑をここに建立された。
文学博士・橋本循氏撰文　京都の三時知恩寺門跡の久我信成氏書

●和束町　大井手用水災害復旧　昭和 28 年水害

（碑文　背景）

瓶原は恭仁京の頃から水利の便が悪く、畑ばかりで米の収穫が殆どないところであった。

農家は旱魃の被害を受け困窮していた。

鎌倉中期（1222 年）海住山寺慈心上人の努力で和束川から水を引き、10 数年かけて約７㎞の大農業用水路（大井手用水路）を造った。当時は機械などなく、全て人手で山肌を拓き、岩を削る大変な工事であった。

これにより瓶原の米の収穫量は約 600 石から江戸時代には 2500 石までになった。

昭和 28 年(1953)、南山城大水害で一部損壊し、下流に井堰が新設されたが 800 年経った今もその当時の基本的な仕組みは変わることなく農業用水として利用されている。

○和束町　和束中学校門前　昭和 28 年水害

（碑文　原文）

水難者慰霊碑

昭和二十八年八月十四日の日没より驟雨来たり深更に及ぶにつれて雷鳴地軸をゆるがす大豪雨となり遂に未曾有の降雨に達し翌十五日未明には各所に山津浪起こり河川は急激に増水し濁流は奔馬の如く瞬時にして多数の家屋は流失或いは全壊し尊き人命は数多殉難し祖先傳來の耕地は砂礫の荒野となり道路は寸断

され交通は全く杜絶し住民の生活は根底より覆され為めに天日暗く山紫水明の和束郷一帯は一夜にして荒廃し住民の失意絶望は言語に絶す　世に之を南山城水害と称す其の被害は二十数億圓に及び殉難者一一一柱重症者一九名家屋の流失全壊一九六戸半壊六八戸床上浸水二〇七戸田地の流失埋没二一一八反道路の決壊三六八ケ所橋梁の流失一一三ケ所堤防の決壊六〇ケ所にして誠に甚大なり一時呆然自失せる住民も相寄り相扶け互に平静をとりもどして奮起し協力一致復興に努力し加ふるに関係官庁の激励と指導を得て今や大半の復旧を見るに至る今日をみし茲に碑を建立して殉難の諸霊を弔い災禍の記録と後の世に遺す

昭和三十三年三月　吉日

和束町

（碑文　背景）

昭和 28 年(1953)8 月 14 日の日没から降り始めた雨は夜半に雷を伴う豪雨となり、15 日未明には和束町の各所で土石流が発生し、死者 111 名、家屋の流失・全壊 196 戸、床上浸水 207 戸、道路の崩壊 368 ヶ所、橋梁の流失 113 ヶ所、堤防の決壊 60 ヶ所等の被害が発生した。

氾濫した和束川沿いの低地に設置されていたが、平成 25 年(2013)に現在地である高台に移設された。

(京都新聞記事平成 25 年(2013)年 4 月 22 日から引用)

昭和 28(1953）の南山城水害で、京都府和束町は和束川の水位が 6 メートルも上昇した。

町を貫くこの川の氾濫で、死者、行方不明者は 112 人（京都府調べ。当時の西和束、中和束、東和束村の合計）に上った。西和束村に住んでいた竹谷奈代さん＝和束町石寺＝は当時中学２年生。川沿いの商店で祖父、妹と３人で暮らしていた。

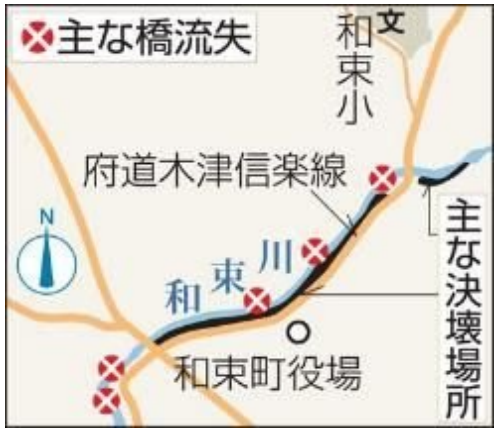
8 月 14 日の夕方から降り始めた雨は深夜にかけて猛烈に勢いを増した。「早よ起きてこーい」と祖父の声で目を覚ました。

川が道の高さまで来て、水がたぷん、たぷん、と出てくるのが見えた。見る見るうちに道が川になってしもうて、店先に水が滝のように入ってきて、ぐるぐるっと渦巻いて商品を持って行った。「流れるー」と止めようとしたが、まるで津波のようやった。

はす向かいのたばこ屋は少し高い場所で、無事だった。

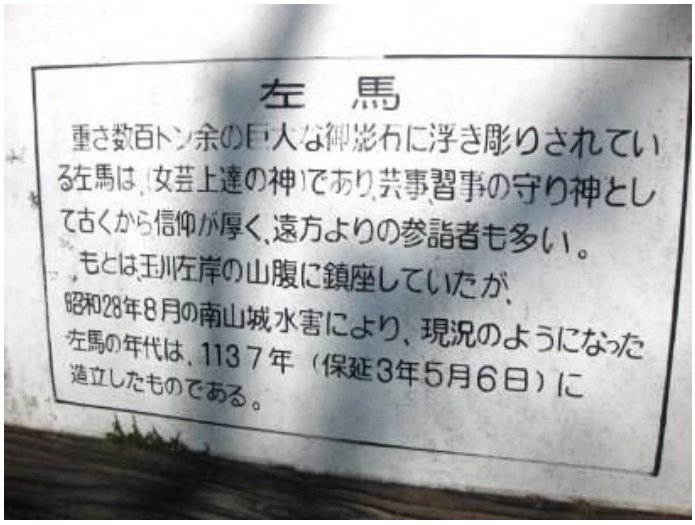
祖父が「値高いもん（商品）を運べ」というので、水に浮いた商品を踏み、腰まで漬かりながら、たばこ屋まで何回か酒を運んだ。そうしていると近所のおじさんに「われ何してんのぞーっ」と怒鳴られた。「酒運んでんねんかー」と

いうと、「こんな時に何言うてるかーっ」と、酒瓶を持ったまま引きずり上げられた。
そこも水が増え、土手に上がった。そこで無事だった妹と会えた。
家が流される時、ガラスが「バババーン」と音を立て、魚みたいに飛び散って上がるのが見えた。
上流の中和束村は死者、行方不明者の大半、101 人という大きな被害を出した。橋や道路が寸断され、救援も遅れた。
川沿いに家があった方は、暗闇の中、必死で避難した。
雨はバケツで頭から水をかけられたような感じやった。
あたりは真っ暗で、雷がピカッと光ると同時に家族で走って山の方に逃げ、無事やった。
親戚が笠置の方から来たが、橋が全部流れて近づけなかった。
救援部隊は、宇治田原方面からリュックサックを背負って山越えで物資を運んでいた。ヘリコプターが運んできたドラム缶入りのミルクの粉を溶かして飲みました。
奥様も近くで水害を体験した。雨が降り始めたころ、川沿いの親戚の家にいた。盆踊りの季節で泊まるつもりだったが、父親が迎えにきた。ぐずる忍さんを親戚の若者が「またあしたおいで」と説得して帰らせた。
その夜、その家は流され、親戚たちはみな亡くなった。
親戚のお兄ちゃんが私を背負うためのへこ帯を父に渡したのを覚えている。
家に帰ってから父が親戚に避難を呼び掛けに行ったが、もう近づけなかったそうだ。
父は「『助けてー、助けてー』という声が耳から離れん」と言っていた。



和束川の氾濫で被害を受けた中和束村の家屋
（昭和 28 年(1953)8 月 15 日、和束町役場提供）

●井手町　玉川　左馬　昭和 28 年水害



（碑文　背景）

もとは玉川左岸の山腹に鎮座していたが、昭和28年(1953)の南山城水害により、河川敷付近に崩落した。

※毎年、地域の方が年末にしめ縄飾りをつけられ、災害の伝承をされておられる。

●宇治市　西体育館　昭和 28 年水害

（碑文　原文）

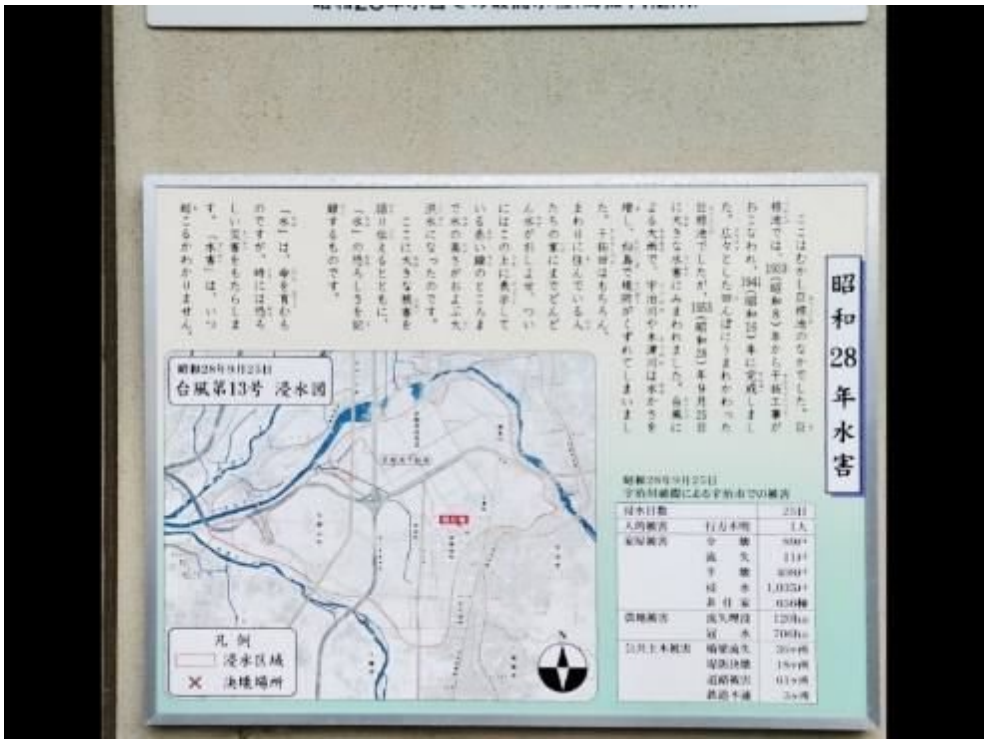
万葉の昔より詩歌、文芸にあらわれた巨椋池は、古くから洛南の名勝地として知られ、古代よりわが国の歴史とともに歩んできた池沼であった。

淀・木津・桂の三川が合流して一大遊水地帯をなし、舟運の要衝であったが、沿岸住民は度重なる水害に悩まされていた。近時沿岸町村間に開墾干拓の要望が勃興し昭和十六年干拓工事の完成を見、現在の美田約七百ヘクタールが出現し米三万石が産出されるようになった。

昭和二十八年九月二十五日、十三号台風により淀川堤防が決壊、濁水が干拓田に流入、接続地とともに水没し昔時の巨椋池の再現を思わせた。その時の水位がこの碑の頂点である。

巨椋池土地改良区理事長　池本樽三郎

●宇治市　南小倉小学校　昭和 28 年水害



（碑文　原文）

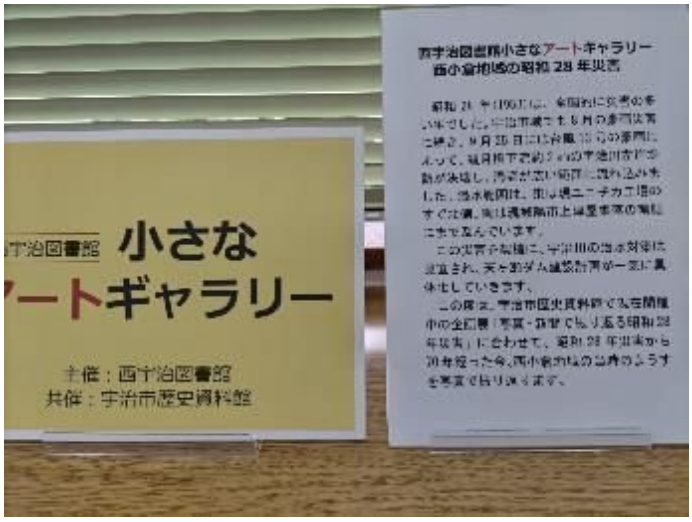
ここはむかし巨椋池のなかでした。巨椋池では昭和 8 年（1933）から干拓工事がおこなわれ昭和 16 年（1941）に完成した。蒼々とした田んぼに生まれ変ったが、昭和 28 年(1953)9 月 25 日に大きな水害にみまわれた。台風による大雨で宇治川や木津川の水かさが増し、向島では堤防がくずれてしまった。

巨椋池はもちろんまわりに住んでいる人たちの家にまでどんどん水が押し寄せ、ついにはこの上に表示している赤い線のところまで水の高さが及ぶ大洪水になった。

ここに大きな被害を語り伝えるとともに「水」のおそろしさを記録する。

「水」は命を育むものですが、時には恐ろしい災害をもたらします。災害はいつ起こるかわかりません。

⇑　宇治市　山際通り想定浸水深の表示



⇑西図書館での特別展示

●久御山町　大池神社　昭和 28 年水害

（碑文　原文）

万葉の昔より詩歌、文芸にあらわれた巨椋池は、古くから洛南の名勝地として知られ、古代よりわが国の歴史とともに歩んできた池沼であった。

淀・木津・桂の三川が合流して一大遊水地帯をなし、舟運の要衝であったが、沿岸住民は度重なる水害に悩まされていた。近時沿岸町村間に開墾干拓の要望が勃興し昭和十六年干拓工事の完成を見、現在の美田約七百ヘクタールが出現し米三万石が産出されるようになった。

昭和二十八年九月二十五日、十三号台風により淀川堤防が決壊、濁水が干拓田に流入、接続地とともに水没し昔時の巨椋池の再現を思わせた。その時の水位がこの碑の頂点である。

巨椋池土地改良区理事長　池本樽三郎

●京都市　伏見区　巨椋池排水機場　昭和 28 年水害

（碑文　原文）

昭和 28 年 9 月 25 日、台風 13 号による大雨で、宇治川が決壊し、干拓地及びその周辺約 2900 ヘクタールが浸水、干拓田の完全排水を終えたのは、その 25 日後のことであった。この碑の天端高さが、その時の最高水位を表す。

●久御山町　久御山排水機場　昭和 28 年水害

（碑文　背景　一部久御山町 HP から引用）

昭和 28 年(1953)9 月 16 日、トラック島付近で発生した熱帯性低気圧は勢力を増し、台風 13 号となった。25 日午後 3 時には中心気圧 930hpa、最大風速 50m/s の猛台風となった。

久御山では、24 日午前７時から翌 25 日午後６時までの連続雨量は 217 ㎜を記録。台風による風雨は、25 日の午後７時ごろには衰えたが、木津川、淀川は危険水位を突破。

木津川の堤防では消防団などによる土のう積みが身を挺して行われ、決壊はまぬがれた。

ところが、淀川の満水により木津川、桂川が宇治川へ逆流をはじめ、25 日午後 9 時 30 分に宇治川左岸（現在の伏見区向島大黒付近）が決壊し、御牧、佐山両村は水没した。
当時の御牧村の記録では「本村は管内最低地にあるため、水深 5mにして全村殆ど床上浸水の状態になり、暗黒の深夜子を呼び、親を尋ね救いを求める悲痛な叫び声は、今も耳じ朶だに残って消えないのであります」とされている。
避難の状況は、大久保小学校、小倉小学校、明親小学校などに分宿。逃げ遅れた人が屋根の上で救出を求める姿が各所でみられた。翌 26 日、宇治保安隊、伊丹・枚方両駐屯部隊など約 350 人が鉄舟に乗って、逃げ遅れて孤立している住民の救出作業を行った。その後、避難所生活は２週間近くも続いたという。
御牧、佐山両村内の最大浸水深は、9 月 25 日午後 9 時 30 分の決壊から約 14 時間後の翌 26 日午前 11 時の時点で記録されている。
浸水の深さは、佐山村の市田で 2.7m、佐古・林が 2.1m、佐山・田井が 1.8ｍ、下津屋は 1.2mで御牧村の低地では５m以上に及んでいる。
また、水が完全に引くまでに低地では約 1 か月を要したという。
昭和 28 年(1953)の水害以降、河川改修や堤防の強化に併せ、内水排除対策が着々と進められている。
市街地からの内水を古川や宇治川に強制的にポンプにより排水する施設として、昭和 48 年(1973)には久御山排水機場（東一口）が、同 53 年(1978)には久御山町佐山排水機場（佐山）が完成。そして、広大な巨椋池の排水を担う現巨椋池排水機場が機能強化され平成 17 年(2005)度に本格稼働した。
この久御山排水機場は、巨椋池地区の内水排除計画の策定に伴って巨椋池排水機場に隣接して新設され、昭和 48 年度に 30.0 ㎥/s のポンプ 1 台が設置されて稼働を開始、その後、昭和 62 年度には 30.0 ㎥/s のポンプ 1 台が増設、平成 4 年(1992)6 月にも 30.0 ㎥/s のポンプ 1 台が増設され、合計排水能力 90.0 ㎥/s の排水機場として現在に至っている。
昭和 48 年(1973)度から稼働している久御山排水機場は、完成からすでに 40 年以上経過している。
久御山排水機場は、宇治川洪水の古川への逆流を防止するとともに、古川の流水を宇治川へ排水することで、久御山町内の沿川での浸水被害を軽減する役割を担っている。

●福知山市　御霊公園　由良川水害

（碑文　原文）

昭和 28 年浸水位

標高 20m69 cm

昭和 28 年 9 月 25 日　台風 13 号

●福知山市　大江町　河西体育館　由良川水害

（碑文　原文）

昭和 28 年 9 月　台風 13 号想定水位　TP+15.77m

平成 16 年台風 23 号　浸水位　TP+15.04m

もしもの洪水に備えて

平成 16 年台風 23 号での浸水区域図表示（福知山河川国道事務所）

由良川地域水防災対策計画水位　TP+13.27m

●福知山市　大江町　蓼原民家　由良川水害

（碑文　原文）

1953.9.25 台風 13 号　福知山水位 7.80　　大雲橋水位 14.50

2013.9.16 台風 18 号　福知山水位 8.28　　大雲橋水位 10.85

2004.10.20 台風 23 号　福知山水位 7.53　大雲橋水位 10.96

2018.7.7 7 月豪雨　福知山水位 6.52　　大雲橋水位 9.85　樋門水位外水　内水

●福知山市　大江町　蓼原堤防　由良川水害

（碑文　原文）
S28.9.26　台風13号　TP15.90m
平成25年9月台風18号浸水位
水がここまできました。
　TP14.83m

平成16年9月台風23号浸水位　TP14.83m
昭和34年伊勢湾台風浸水位　TP+14.60m

平成30年7月浸水位（内水）
水がここまできました。
　TP13.62m

S47.9.17　台風20号　TP13.30m

●福知山市　大江町　道路嵩上紀念　由良川水害

（碑文　原文）

道路嵩上紀念

由良川跨両丹一大河線其流域渉二十餘里然沿岸地區狹隘頗迂曲蜿蜒矣爲是頻年氾濫其被害無莫也明治二十九年洪水之際増水量三十八尺同四十年更増五尺實示四十三尺奪人畜流失家屋荒廃耕地蕩尽肥壌寝無家食無粟其悲惨不可名状焉偶地方有志者胥議組織治水會出願改修之事時期府大森鍾一氏深賛其挙排萬難遂裁決之大正二年起工再來着々進其歩武順次遡上流大正五年二月入當地域也對岸夏間磧屑土石堀鑿之部而我部落内鎮守府街道概低窪加之一高一低恰為波状霖雨僅至輒河水侵入絶交通妨運輸為當此時我部落私思採彼充是一擧両得好機不可逸直求之設計遂至見此大成功今也道路延長千間餘平均嵩上五尺沿道宅地亦伴之更得沼澤不毛之地變化田土者千六百坪而誂工事所要土坪参萬人夫實算数萬若夫如工事

中桟橋妨土砂運搬之功及数囲其為難工事可知也然而竣成不愆期以得達積年宿望

萬衆齊安其堵亨利便亦籍甚雖茲相謀方建碑於河畔形勝之地持録関係偉功者氏名以傳後昆云爾

京都府土木課長　従五位勲六等　寺崎　新策
仝　　技師　　従六位　　高田　景
仝　　第三區土木工營所長　技手　網谷　政次郎
　　工手　佐々木　次郎
　　工手　夛賀　佐助
維持大正六年一月　公庄部落建立

●福知山市　大江町　頌徳碑　由良川水害

（碑文　原文）

頌徳碑

仁張萬作翁

蓼原之地古来蒙洪水之脅威區
民不■安生業民力涸渇窮乏至
其極更生之法唯有宅地嵩上之
一途耳昭和四年十一月決實行
之議也推仁張萬作翁為総務翁
擧赤誠當其任官府之稟議民間
之協定折衝最力爲昭和六年末
国道改修同時着手■宅地嵩上
■此基地元来係子當區之私営
起工以来■逢難関進退窮者不
一再殊工事未半而會不慮之蹉
跌■期逼目前人心拘■翁■■
間幹旋苦闘殆忘寝食而裁断合
宜着々進工昭和七年六月遂竣
成■洵是翁献身的努力之賜在
所區民不堪感激乃相謀建碑以
頌其徳併示後世云

昭和八年十二月建

※■は判読困難

●京都府　京丹波町和知町　舟戸橋　由良川水害

（碑文　原文）

舟戸橋史

往古一條の綱に依書状通信をしたるに依り状吊と称す舞鶴京都の要路たり文政十三年渡舟場明治初年丸太橋明治二十二年府の許可を得橋銭を徴す板橋を架設舟戸橋と称す町村制に依り村道と成大正十二年由良川發電所創設に倶ひ鉄線吊橋となりたるも再三風水害を蒙り又昭和二十八年九月二十五日台風十三号に依り根こそぎ流出の憂目に相ひ村長以下係員の熱意と村民の努力と国庫補助に依り永久橋を架設され地元民の受益浩大にして歓喜に堪ず記して後昆に傳へん

村長　片山忠俊
助役　瀬野政行
収入役　梅原良一
村会議長　原田栄之助
仝副議長　谷半治郎
土木委員長　下林俊一
土木書記　白波瀬米藏
仝　　木下清太郎
土木委員　片山征男
仝　　十倉武太郎
仝　　樋口義雄
仝　　尾池富三郎
地方委員　大村慶太郎
仝　　西村源太郎

仝　　原田金太郎

昭和二十九年三月着工
昭和三十年三月完工
施工者　京都　公成社
和知　河田組

●南丹市美山町　大野ダム　由良川水害

京都府大野ダム管理事務所「大野ダムの洪水調節について」（財団法人ダム水源地環境整備センターHP より引用）

（碑文　原文）
大野ダムにおける最高水位標 2013 年 9 月 16 日の台風 18 号での最高水位 EL175.37m 及び 2004 年 10 月 20 日の台風 23 号での最高水位 EL173.54m を明記

（碑文　背景）
平成 16 年(2004)10 月 20 日の台風 23 号では下流域の由良川で大野ダムは、下流の洪水を防ぐために貯水を続けていたが、流入水量が多く、水位が上がってサーチャージ水位（これを超えるとダムから水があふれることになるため、洪水時でもこれを超えることが出来ない最高の水位）に到達することが予測される事態となった。ダムの操作は操作規則で定められているが、このようなときには、ダムがあふれるような事態を避けるため、放流量を流入量と同じ水準になるまで徐々に増やしていくのが一般的なルール。ところが、下流でバスが立ち往生し、37 人が救出を待っていた。このとき、人命尊重のため、ぎりぎりの判断であふれる直前まで放流量を抑えバスの屋根にいた 37 人は流されることなく、全員が救助された。
ダム操作の責任者である当時の京都府土木建築部長は、操作規則を逸脱することから知事あての進退伺いを内々に手にしていたとのことである。

○綾部市　水の記憶の碑小公園　由良川水害

（碑文　要約）

昭和 28 年(1953)9 月 25 日、台風 13 号により正午から夕刻にかけて由良川上流では時間雨量 30㎜～60㎜ の降雨があり、総雨量は 3 日間で、約 500㎜ に達した。

昭和 28 年の大水害という自然の猛威を市民の記憶にとどめ、同時に水の恩恵を忘れないために、大洪水を耐え抜き由良川と綾部の街にとって象徴的な存在となっている綾部大橋の旧親柱を「水の記憶の碑」として設置。

〇福知山市　福知山河川国道事務所隣接地　由良川水害

（碑文　要約）

改堤碑

明治 29 年(1896)8 月 30 日、夕方には豪雨となった雨のため、由良川の水位は約 9.7m に達した。

京口、広小路口など各所で堤防が決壊し、家屋流失 300 件余り、溺死者 230 人余り、負傷者 200 人余りの被害があった。

また、明治 40 年(1907)8 月 26 日の洪水では、京口、明覚寺裏、広小路口のほか各所で堤防が決壊し、溺死者 5 名、負傷者多数の被害があった。

〇福知山市　由良川左岸堤防　由良川水害

悠久の
歴史を映す由良川の
治水遂めて五十年

碑文

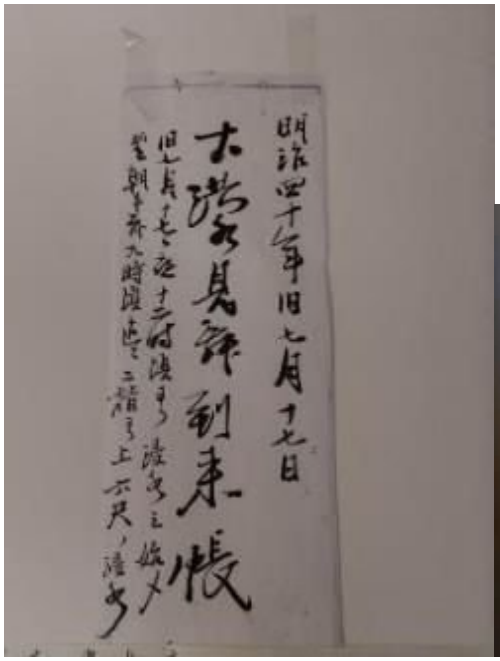
（碑文　要約）

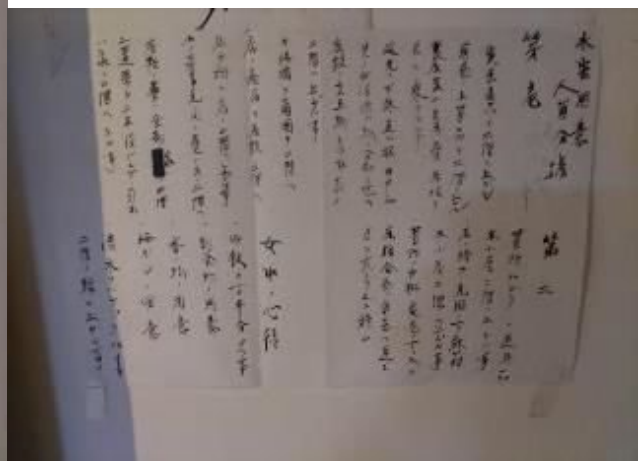
二十八災　堤防決潰之地

昭和 28 年(1953)9 月 25 日、台風 13 号により正午から夕刻にかけて由良川上流では時間雨量 30㎜～60㎜ の降雨があり、総雨量は３日間で約 500㎜ に達した。同日午後 9 時頃には和久市の堤防が決壊し、福知山市では死者 4 名、家屋流失・浸水家屋約 5 千 5 百戸を数えた。

流域の綾部市、大江町（現　福知山市大江町）でも被害があった。

●福知山市　治水記念館　由良川水害





（施設　背景）

由良川の水害との闘いの歴史と、これからの水防のあり方の重要性を伝える施設として、築 140 年の町家を改修して整備された施設。

記念館の建物は明治 10 年代に建てられたもので、屋根裏には水害時の避難場所となる大きな空間を設け、避難時の荷揚げ用滑車など、水害に対する備えが工夫されている。

福知山の町家（商家）を象徴する歴史的価値の高い建物で、明治から大正・昭和にかけての商家のたたずまいが残されている。

洪水時、荷物を上げる「タカ」、浸水模型、水位モニュメント、明治 40 年の洪水時の水害での経験を踏まえた洪水に対する用意に対する人員分担資料、2 階の襖のとろこまで来た水位の痕跡が展示されている。

●福知山市　法川排水機場　由良川水害

（碑文　原文）

由良川は京都府滋賀県及び福井県の境にある標高 959m の三国ヶ岳を源とし、福知山盆地を経て宮津市由良で日本海に注ぐ流路延長 152km、流域面積 1882 平方km、京都府の面積の約 40%の大河である。その清流は農業を主とするさまざまな生産基盤と、生活環境を生み出し育ててきた母体である。

沿川に開けた城下町福知山が陸路水路の要衝として発展してきたのも、由良川によるところが大きい。しかし、一方自然河川であったため洪水により、過去幾度となく大災害を招き、尊い人命や貴重な財産が失われてきたのも事実である。

とりわけ明治 29 年、同 40 年、そして昭和 28 年の洪水は大災害をもたらした。昭和 28 年 9 月 24 日台風 13 号による由良川水位福知山地点は、同 25 日午

後 11 時、過去最高の 8.1m を記録し、和久市及び猪崎付近の堤防が決壊。市街地を中心に受けた大惨事を忘れることはできない。
水害から何とか免れたい、由良川を愛しながらも、その治水対策は長年にわたる住民の切実な悲願であった。由良川及び土師川の本格的な堤防補強工事は昭和 31 年 5 月から開始され、この付近にあった蛇ヶ端樋門も当時造られたもので、洪水時法川への逆流を防いだ。
昭和 41 年には一級河川に編入改修事業は年々促進された。とりわけ昭和 49 年に完成した支流和久川の改修によって内水禍をほぼ解消。市街地を西方へ大きく拡張することとなり、さらに内水禍を完全に解消するため、ポンプ場の建設が進められている。また堀地区の内水禍を防ぐため、昭和 48 年から着工された法川排水機場が、昭和 53 年 3 月に完成。これによって荒河に至る約 3.5㎞に及ぶ市街地を守る治水事業がほぼ完工したことになる。この付近も由良川の水勢をやわらげるため、古くから植えられていた竹藪が今も一部、その面影を留めてはいるが、日に日に近代河川に生まれ変わり市民の悲願が実りつつある。
私達は由良川の洪水と内水による苦難の歴史を忘れることなく、そして再び災害を被ることなく、母なる川・由良川の流れとともに躍進福知山市を築いていかなければならない。
法川排水機場の完成を機に、治水事業に格段の御努力をいただいている建設省並びに、関係市民各位に心から感謝の意を表し、ここに記念碑を建立する。

昭和 53 年 4 月　福知山市

●福知山市　堤防神社　由良川水害

（碑文　背景）

福知山は古くから、由良川の氾濫に悩まされてきた。天正 8 年（1580）に光秀が由良川の付け替えや堤防造営を行って以降、さまざまな治水工事が行われ、水害は減少した。

このことから福知山市では、氾濫を抑える大切な役目を担う堤防に感謝して、毎年 8 月 15 日に堤防祭りが行われている。

これに伴い昭和 59 年(1984)に建立されたのが、日本で唯一の堤防を御神体とする神社である。

過去の水害を忘れないための拠り所とされている。

●綾部市　綾部用水堰　由良川水害

綾郁用水改良事業

（碑文　要約　京都府中丹土地改良事務所パンフレット冊子から引用加筆）
近藤勝由の事績
氏は文政 10 年（1827）、綾部藩に生まれる。
性剛直苟くも意思を枉ざるの風あり。
土木はその最も長所にして､理財にまた長ず、嘉永元年綾部藩代官となるや、土木のことを兼ね司り部内の土木に竭せしもの尠からず、就中天田堰を綾部堰に合併したる功績の如きは其の最顕著なものとす。
綾部、天田両堰は、共に由良川の流域にありて灌漑反別一は 130 余町歩、一は 170 町歩に渉る大堰になりしも往々洪水に際しては堰体を破壊せられ、其復旧維持は村民の最苦痛とする処なりしが、慶応 2 年(1866)8 月大洪水あり、天田堰遂に流失し､その復築蓋容易の業にあらず､村民の憂苦困憊非常なるものあり、ここに於いてか氏は断然天田堰を廃し綾部堰に合併せんと欲し、之を藩主に献策して嘉納せらるるや当時衆皆其成功を疑ひ異論百出するに至りしも、氏之に動ぜず日夜鋭意計画に力め、時の大庄屋羽室嘉右衛門氏等と相謀り、2 月 28 日起工、隷下の部民を使役して以て日夜これを督励し延裏より大島に至る長さ 8 町余濶、12 尺草莱を拓きて岩石を砕き苦心惨憺難工事を短日にして天田堰なる井溝に連続、遂に目的を達したり維時 3 月 8 日なり、茲に於て綾部堰の一大水路を以て延長２里余に亘る元両堰の区域全部に潅漑せしのみならず、将来の維持費を節減して経費多大の利益を得せしめたり。
尚又明治 17 年(1884)8 月大洪水がありて、由良川筋に築造せる井堰及樋閘等破壊せらるる処多く､衆議之れが復旧工事の施行を氏に嘱託するや､是亦 3 旬の短日にて竣成せり。
而も其工事の困難なりし事、前日の比にあらざるという、ここに於て明治 25 年(1892)組合員等氏の功績を不朽に伝えんとし､元何鹿郡長宮崎清風氏に撰文を嘱し之れを碑石に刻み綾部堰の西岸に建立せり。
之れ現在の原碑なり因に氏は明治 34 年(1901)9 月齢 75 才を以て没せり。

（碑文　背景　農林水産省 HP から引用）
由良川が綾部、福知山市域の平野部に入るところに、この地域の主要な取水施設の 1 つである「綾部井堰」がある。
この井堰を守り続け、綾部用水の基礎を築いたのが近藤勝由であった。
勝由が綾部藩きっての井堰の専門家となったのは、土木好きのうえ、関東地方で発達した河川工事、井堰などについて熱心に研究したから。
慶應 2 年(1866)の洪水により、綾部井堰の下流にあった天田井堰が大きな被害を受けた。
そこで勝由は、天田井堰と綾部井堰を統合しようと考え、約 900 メートルの水

路を掘り、2 つの井堰の水路をつなぐ計画を立てた。
困難で無謀な工事だと農民からの反対にあったが、勝由は私財を投げうって工事に取りかかった。
勝由は、昼夜現場に立って指揮をとり、わずか 40 日で完成させ、これにより、綾部用水の基礎が築かれた。
その後も井堰は洪水で破損し、明治 17 年(1884)に井堰の改修が計画され、当時郵便局長であった勝由に依頼があった。
井堰と関係のない役職にもかかわらず、工事の責任者を引き受け、地域の水不足の解決に力をつくした。
現存する井堰は、昭和 28 年(1953)の大災害後に造り替えられたものであるが、勝由の行った業績は、綾部井堰の功労者として今なお語り継がれている。

●舞鶴市和江　瀬戸島開紀功碑　由良川水害

（碑文　背景）

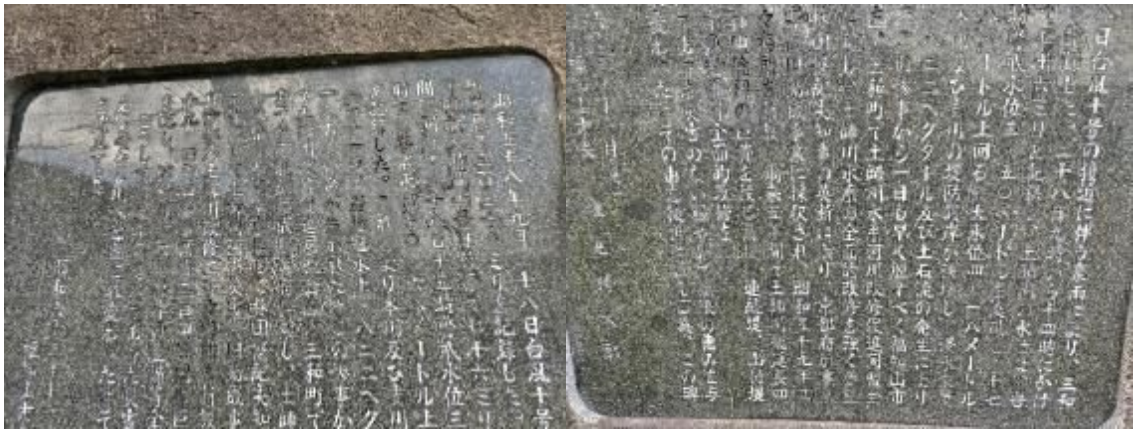
慶長 3 年(1598)に細川幽斎が二位座に櫨の実の模範畑を造り、また翌 4 年由良川への突出部を切断して流勢をやわらげようとし、この部分が瀬戸島として残った。

寛永 2 年(1625)、開削工事により洪水となり、田畑が流失した。

大正 2 年(1913)京都府の工事で細川忠興の取り残した瀬戸島の削り取り高田耕地が造成された。

昭和 18 年(1943)渡船場が廃止され、昭和 41 年(1966)瀬戸島水際部分の掘削と西島取除きの廃土により、和江の谷・西島新田の埋立てが完了した。

●福知山市　一級河川土師川河川災害復旧助成事業完成記念碑　由良川水害



（碑文　原文）

昭和58年9月28日台風10号の接近に伴う豪雨により、三和町兎原で338ミリを記録した。28日9時から14時にかけての最大時間雨量は兎原で76ミリを記録し、土師川の水位は岩間観測所で28日15時警戒水位3.50mを突破し、17時には、警戒水位を0.68m上回る最大水位4.18mを記録した。これにより、本川及び支川の堤防護岸が決壊し、浸水家屋211戸、農地冠水10.822ha及び土石流の発生により、一人の尊い命が失われた。この惨事から1日も早く脱すべく福知山市で土師川改修促進同盟会を、三和町で土師川水系河川改修促進同盟会をそれぞれが結成し、国府に対し、土師川水系の全面的改修を強く要望し陳情した。幸いにして林田悠紀夫知事の英断により、京都府が事業主体として、土師川河川災害復旧助成事業に採択され、昭和59年4月京都府土師川改修工事々務所を新設、爾来5年間で土師川総延長49.4キロ総事業費204億円の巨費を投じ、霞堤、連続堤、山付堤を配し、河積の拡大護岸の整備等全面的改修をした。

こうして、長年の悲願であった災害のない穏やかで無限の恵みを与える母なる川へと生まれ変わった。その由を後世に伝える為、この碑を建立する。

昭和63年11月　吉日

福知山市長　塩見　精太郎

※土師川は由良川水系の河川

●舞鶴市　国道 175 号　由良川水害

⇑　「人生波待ち日記 HP」から引用

（碑文　背景　平成 16 年(2004)年 10 月 22 日　京都新聞から引用）
台風 23 号京都府北部に記録的豪雨由良川水位 7.5 メートル超す戦後２番目

記録的な大雨で氾濫した由良川（平成 16 年(2004)10 月 21 日）

台風 23 号で下流域が大きな被害を受けた京都府北部の由良川は、20 日から 21 日にかけ、戦後最大の被害を出した昭和 28 年（1953）の台風水害以来、戦後 2 番目の雨量と水位を観測していたことが、近畿地方整備局福知山河川国道事務所の調べで分かった。
特に舞鶴市の国道で観光バスが立ち往生した 20 日夕から深夜にかけては水位が急激に上昇し、乗客らの避難の遅れにつながった。
舞鶴海洋気象台によると、20 日の舞鶴市内の一日の雨量は 277 ミリと観測史上最高を記録した。近畿地方整備局によると流域の平均雨量も 279 ミリと戦後二番目となった。上流の綾部市でも総雨量が 300 ミリを超えた。
福知山水位観測所では 20 日午後 10 時すぎに、1953 年水害の水位 7.80 メートルに迫る 7.55 メートルに達した。
同日昼から時間雨量 15 ミリを超える強い雨が 6 時間降り続き、舞鶴市志高の国道で観光バスが立ち往生した午後 8 時ごろには水位が毎時 50 センチのペースで急激に上がっていた。
上、中流域では 20 日のうちに水位が下がり始めたが、最下流の舞鶴市では 21 日になっても上昇が続き、現場の下流にある大川橋では同日午前 2 時 10 分に 8.10 メートルを記録した。
福知山河川国道事務所の調査第一課長は「水位が急上昇したのは、強い雨が広い範囲で長時間にわたって降ったため。昭和 28 年（1953）水害は話で聞いたことはあるが、実際にこれほどの水害を体験したのは初めてだ」と話した。

※なお、このバスの近くでは、トラックの運転手 1 名の尊い命が失われた。

●福知山市　大江駅東　由良川水害

（碑文　原文）

昭和 28 年、平成 16 年、平成 25 年、平成 30 年をはじめとする最大水位の表示

●福知山市　雨過天晴　由良川水害

（碑文　原文）

雨過天晴

昭和 28 年（1953）は各地で洪水が多く発生しました。由良川流域では、6 月、7 月につづき 9 月 25 日、台風 13 号によるこの時 3 度目となる洪水に見舞われました。台風 13 号が紀伊半島から東海地方に抜けるこの正午から夕刻にかけて由良川上流では時間雨量 30㎜～60㎜、総雨量は三日間で、年間降水量の概ね三割の約 500㎜ に達する降雨となりました。その雨は濁流となって一気に中流部・下流部を襲い、大江町では河守地区で最高水位が 14.5m に達し、死者 8 名、負傷者 33 名、家屋流失などの住宅被害約 1300 戸を数えるなど明治 40 年の洪水を上回る未曾有の水害となりました。

また、上流の福知山市では、死者 4 名、家屋流失・浸水家屋約 5500 戸、綾部市では、死者・行方不明者 25 名、家屋流失 121 戸を数えました。

由良川に大きな被害をもたらしたこの昭和 28 年 9 月の大水害から半世紀の節目

にあたり、当時の悲惨な状況から得た貴重な記憶を風化させることなく、後世に引き継ぐことを目的にこの碑を建立します。

平成 15 年 9 月 25 日

国土交通省福知山河川国道事務所

大江町

●南丹市日吉町　火災

（碑文　背景）

貽訓石

昭和 16 年(1941)、山陰線の蒸気機関車のばい煙がかやぶき屋根に燃え移ったことで発生し、100 戸を越える民家などが全焼する大火災であった。

大火を教訓に、殿田では「家屋を建築する際は、隣家に面する側は防火設備をする」という条件が付き、外壁の両側に「袖壁」を付けること、屋根の軒に土を塗り込むこと、隣の家屋から二尺（約 60 センチ）離して建てること、数軒おきに田原川へ避難できて消防車も通れる道を付けることが義務づけられた。

このような防火の工夫は、今でも殿田にて伝承されている。

●京都市　上京区　清浄華院　火災

（碑文　原文）
焼亡横死百五十人の墓

※隣の石碑には、「狂風」と記載されている。

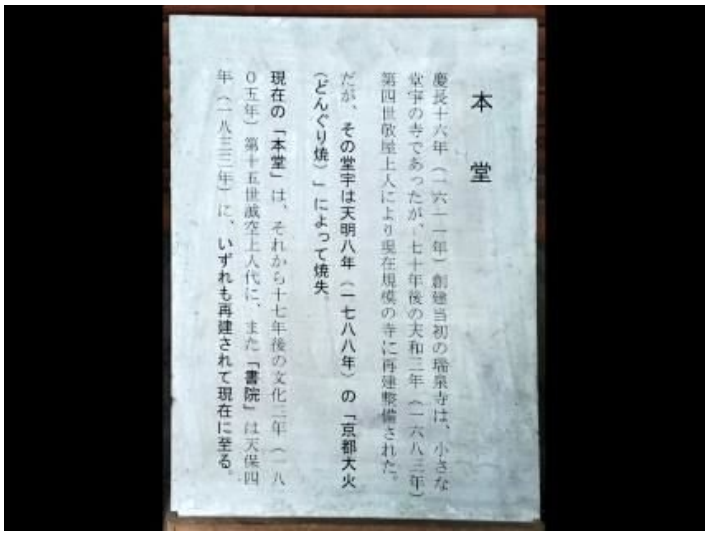
（碑文　背景）
天明 8 年 1 月 30 日(旧暦)（1788 年 3 月 7 日）に京都で発生した火災（天明の大火）で、出火場所より団栗焼けとも呼ばれている。近世の京都で発生した最大規模の火災であり、皇居や二条城などが焼け落ちるなど深刻な被害であったために当時の社会に衝撃を与えた。宝永・元治（どんどん焼け、禁門の変に伴うもの）と並んで「近世京都の三大大火」とも言われている。1 月 30 日の未明、賀茂川東側の宮川町団栗辻子（現在の京都市東山区宮川筋付近）の空家から出火、折からの強風に乗って南は五条通にまで達し、更に火の粉が鴨川対岸の寺町通に燃え移って洛中に飛び火した。その火の夕方には二条城の本丸が炎上し、続いて洛中北部の御所にも燃え移った。
最終的な鎮火は発生から 2 日後の 2 月 2 日(旧暦)未明であった。この火災で東は河原町・木屋町・大和大路まで、北は上御霊神社・鞍馬口通・今宮御旅所まで、西は智恵光院通・大宮通・千本通まで、南は東本願寺西本願寺両本願寺・六条通まで達した。御所・二条城のみならず、仙洞御所・京都所司代屋敷・京都町奉行・摂関家の邸宅なども焼失した。京都の町代を務めた古久保家の記録によれば、焼失した町 1,424、焼失家屋 36,797、焼失寺院 201、焼失神社 37 とされる。死者については 150 人説と 1,800 人説がある。この大火に江戸幕府も衝撃を受け、急遽老中松平定信を京都に派遣して朝廷と善後策を協議した。
また、この直後に裏松固禅によって『大内裏図考證』が完成され、その研究に基づいて、古式に則った御所が再建されることになるが、同時に朝廷の動向が世間の注目を集めるようになり、尊号一件などの紛争の遠因となった。

●京都市上京区　円通寺　火災

（碑文　原文）
為焼亡横死

※清浄華院と同じ「天明の大火」

●京都市　中京区　瑞泉寺　火災



（碑文　背景）

瑞泉寺は秀次事件から 16 年後の慶長 16 年（1611）、京都の豪商・角倉了以と、浄土宗西山禅林寺派の和尚・立空桂叔によって創建された。慶長 15 年（1610）に豊臣秀頼による「大仏殿方広寺」の再建が決まり、建築資材運搬のための水運を確保するため、角倉家に「高瀬川」開削工事の許可がおりた。高瀬川掘削の際に「秀次悪逆塚」と刻まれた石びつが発見され、秀次と一族に深く同情していた角倉了以は荒廃しきっていた墓域を整理することを決意した。慶長 16 年（1611）角倉了以は立空桂叔（開山）と共に、散乱していた遺骨を集め、塚の側に「秀次公御一族の墓石」（現在の墓所）を建立、塚の跡には「瑞泉寺」の創建を意味する小さな庵を建てた。天和 3 年（1683）瑞泉寺第 4 世敬屋上人の代に角倉家より新たに寄進を受け、本堂をはじめ現在規模に近い堂宇が完成した。

天明 8 年（1788）天明の大火で堂宇を焼失したが、御本尊や道具類は避難して無事であった。文化 2 年（1805）再建され現在に至る。

境内には、お地蔵様が 3 体お祀りされている。

●京都市　上京区　本隆寺　火災

⇑　本写真は、撮影時は現地工事中立ち入り不可のため京都市 HP から引用

（碑文　原文）

不焼寺之記

本堂内に安置し給ふ鬼子母尊神は御開祖の彫刻にして霊験顕著なり曾て享保十五年及天明八年の大火は洛中を焼尽して難を免るゝは殆んと稀なり

当山亦火焔に囲まれ猛火は本堂の巽柱迄全燃上り今や大事に至らむとす忽ち見る異容の婦人提桶を携へ傍の千代の井水を汲むて防火に力む奇なる哉猛火直ちに消滅して四面焦土の中両堂のみ魏然として全たきを得たり後尊神の霊容燻り被衣焼け給ふを拝するに及んて都鄙悉く其霊護を湛へ不焼寺を以て称するに至る当時の御被衣は飛火の衣と称して今尚現に宝庫に蔵し千代の井と共に崇重す

大正九年春寿海講創立五十年為記念建之　日軌代　妙覚寺前　石半彫刻

（碑文　背景）

本隆寺は長享 2 年(1488)に六角西洞院に創建された法華宗寺院。

天正 12 年(1584)現在地に定めた。明暦 3 年(1657)造営の本堂は，享保 15 年(1730)の西陣焼け，天明 8 年(1788)の天明の大火に罹災を免れた。
そのため「不焼寺」と称された。
この石碑は本隆寺を火災から救った怪異の伝説を示したものである。

●京都市　中京区　染殿院　火災

（碑文　原文）

染殿院は大同 3 年春(808)空海(弘法大師)の開基にして、大師入唐帰朝の後当院に留まり十住心論を清書調巻されたことから十住心院と称した。

古往は釈迦院或いは敬禮寺又は清和院釈迦堂其他釈迦堂(鎌倉期の一適聖絵巻)とも呼ばれた。

本尊は地蔵菩薩にして高さ 2 メートル余の木彫裸形の立像にて秘仏である。

人皇 55 代文徳天皇(850～858 在位)の后藤原明子(藤原忠仁公の息女)は染殿皇后と申し、この地蔵尊に祈願して皇子を降誕された。

後の清和天皇である。これより染殿地蔵尊と称された。

人皇 62 代村上天皇(946～967 在位)第 3 皇子一品式部郷久賀為平親王は、四条中川のあたり(中川は御所より今の寺町通りに流れていた川)境域広く家造りされた。

染殿地蔵堂も自然この内に含まれ御願寺となって皇子を染殿親王と申した。
66 代一條院永延元年(987)に東大寺沙門奝然が入宋帰朝し赤栴檀の釈迦像を伝来し嵯峨野の清凉寺に安置されたが奝然はまた自ら御丈三尺余の釈迦像１軀を造り当院に奉納(金蓮寺霊宝庫に現存)これより世に四条京極の釈迦堂と呼ばれた。鎌倉期の一遍聖絵巻に「弘安 7 年閏 4 月 16 日関寺より四條京極の釈迦堂の釈迦堂に入り給ふ。

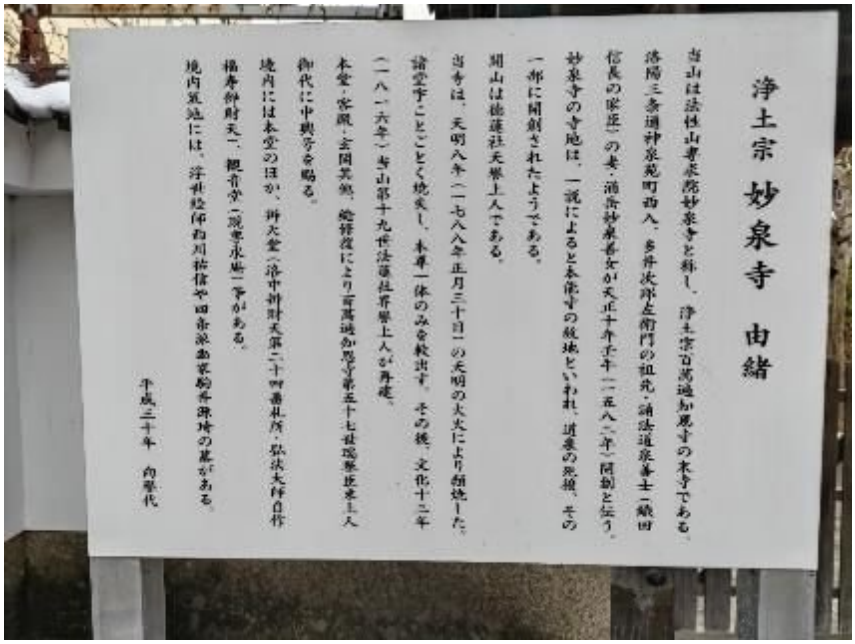
貴賤上下群をなして人はかえり見る事あたはず、車はめぐらすことをえざりき 17 日ののち因幡堂にうつり給ふ」とある、すなわち一遍上人が大津関寺から入洛四條京極の釈迦堂にて念仏賦算をしたというのはこの寺のことである。
金蓮寺よりも釈迦堂の方が歴史も古く、一遍とのゆかりも深いのであるが、室町時代はどの寺社にも属しておらず時の移りとともにその時代の権力者によって次から次にと護持傳来されて来たが、偶々足利義満が嘉慶 2 年 12 月 22 日金蓮寺に寄進したため本末顛倒して金蓮寺の塔頭になった。

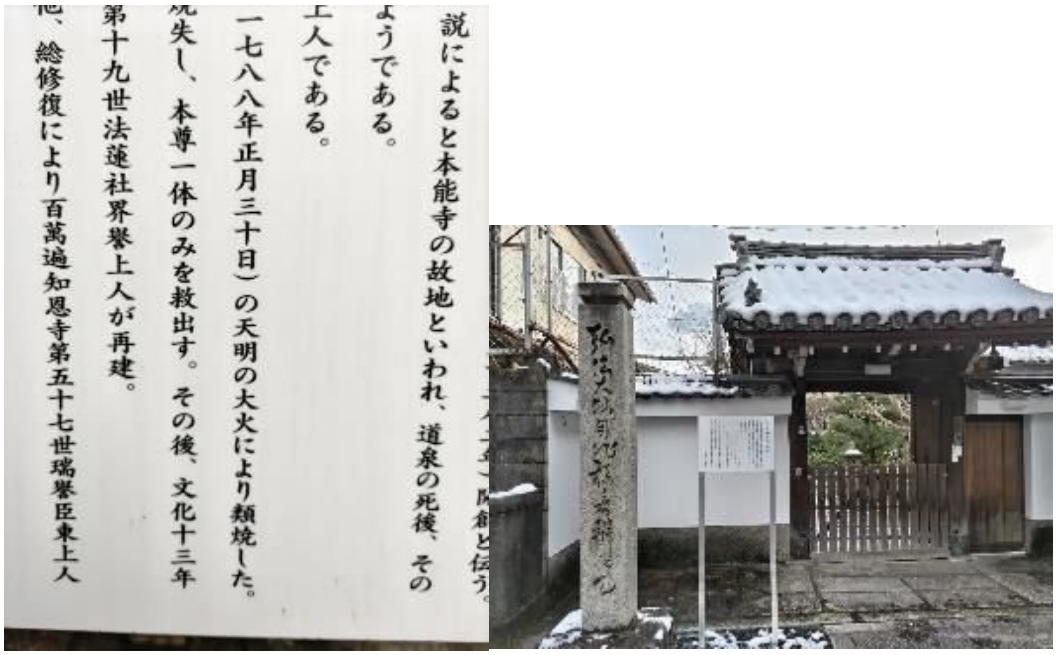
「無窓国師が苔寺(洛西西芳寺)の作庭に没頭したとき、この地蔵尊が一旅僧となって国師を助けたという傳え」、嵯峨天龍寺開山無窓国師が松尾に西芳精舎(苔寺)を創し、泉水の美観を好み築山の構えを営もうとしたとき、石は重く大きく少しも動かなかったが、たまたま一人の僧が忽然として現れ、ただ一人で自由に大石を動かし国師の意の通り庭園を作ったので、国師は歓喜の余り何かお礼をしようかと思案したが幸にその僧は袈裟をもたないのがわかったのでこれを進しようと自ら着けていた袈裟を贈った。

その僧はその袈裟を受け、錫杖を地に立てたまま消え失せたのである。
後日国師が四條の辺に托鉢し、たまたま四條京極の染殿地蔵堂に詣り、御扉を開けて拝すると、先の袈裟は地蔵菩薩の肩にかかっており手に錫杖はなかったので、疑うところもなく件の僧はこの地蔵の化身であったことを知り、国師は感激の涙を流されたということである。現存の染殿院の建造物は、元治元年に京都御所以南が大火に見舞われた（通称ドンド焼け）その時に建てられた假堂である。

（碑文　要約）
現存の染殿院の建造物は、元治元年（1864）に京都御所以南が大火に見舞われた（通称ドンド焼け）の時に建てられた假堂である。

●京都市　中京区　妙泉寺　火災

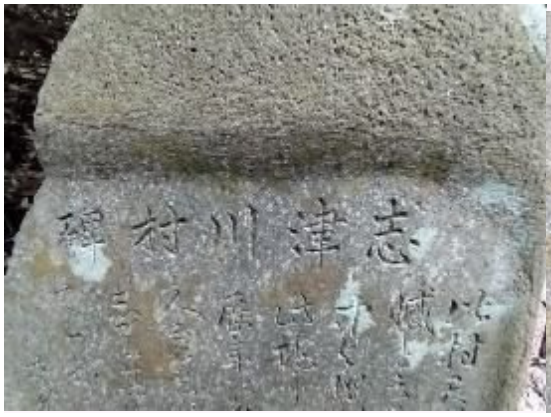


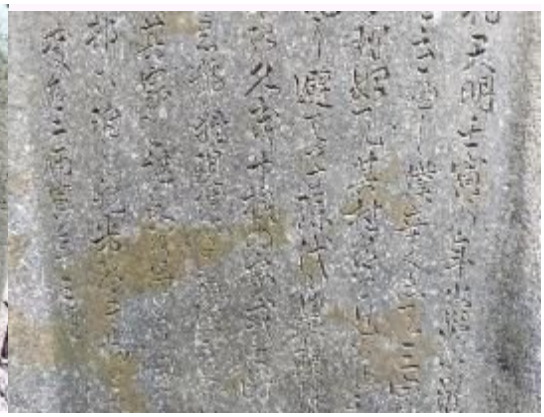


（碑文　要約）

当寺は天明 8 年（1788 年正月 30 日）の天明の大火により類焼した。
諸堂宇ことごとく消失し、本尊一体のみを救出す。
その後文化 12 年（1816）当山第 19 世法蓮社界誉上人が再建。

●宇治市　神女神社　火災





←宇治市史より引用

（碑文　要約）

志津川村碑

此村天明壬寅乃火災に罹由、旧記灰燼して、その来歴を知る人なし遺憾と言べし

天明 2 年（1782）に志津川村で大火災があり、ほとんどの家が消失した。
この火災以降村は困窮が続いた。
これを知った伏見の丸谷甚兵衛（三世）は、養父であり、叔父であった丸谷甚兵衛（二世）が志津川出身であった縁により、復旧に援助することを決めた。
このためには山を購入し、そこに植樹して寄付し村有財産として、村の興隆を願った。

※この石碑は、慶応 2 年（1866）に丸谷甚兵衛（三世）が志津川の発展と火災の恐ろしさを伝承するために建立した。なお、丸谷家は、伏見納屋町の魚屋であった。

●伊根町　丹後大仏　疫病

丹後大仏
300年を紡ぐ絹が織り成す丹後ちりめん回廊
300 years of Silk Weaving Tango Chirimen Textile Road
丹後大仏
The Great Buddha of Tango

（碑文　要約）

明治 33 年(1900)ここ筒川の地に建設された筒川製糸工場は、順調な発展を遂げ、農村経済の発展に著しく貢献していたが、明治 42 年(1909)工場を焼失し莫大な損失を蒙った。

だが、役職員一同一致団結して工場復興計画に協力し工場を復興させた。

大正 7 年(1918)10 月、工場長品川萬右衛門は従業員の慰労のため、全員を引率して東京見物の途に着いたのであるが折り悪く悪性の流行性感冒（スペイン風邪）に見舞われ、帰郷後 42 名の死者を出すに至った。

工場長品川萬右衛門は、殉職者の慰霊のため、ここに青銅の露天大仏を建立したが、太平洋戦争中鉄類の供出にあい、昭和 20 年(1945)、現在の石仏大仏を再建し今日に至る。

※大仏の近くには、招魂碑があり亡くなられた方の氏名が記載され、毎年 4 月 8 日、殉職者の慰霊のため花祭りが行われる。

●京丹後市丹後町　京丹後市立丹後古代の里資料館　皺榎の倒木
(分類困難・その他)風害

(碑文　背景)
『丹後風土記』には丹後には浦島伝説が伝わっている。『丹後風土記』によると、亀姫と結婚した浦島は、玉手箱を開けておじいちゃんになってしまったことを嘆き憤り、顔のしわを木に投げつけたといわれている木があり、これが、『皺榎(しわえのき)』と呼ばれている榎の木である。
この木が平成 16 年(2004)の台風 23 号及び平成 24 年(2012)春の爆弾低気圧の突風により、7 回にわたり折れてしまった。
ここでは 2 回目に折れたものを展示している。

●宮津市　波せき地蔵堂　（分類困難・その他）津波

（碑文　原文）

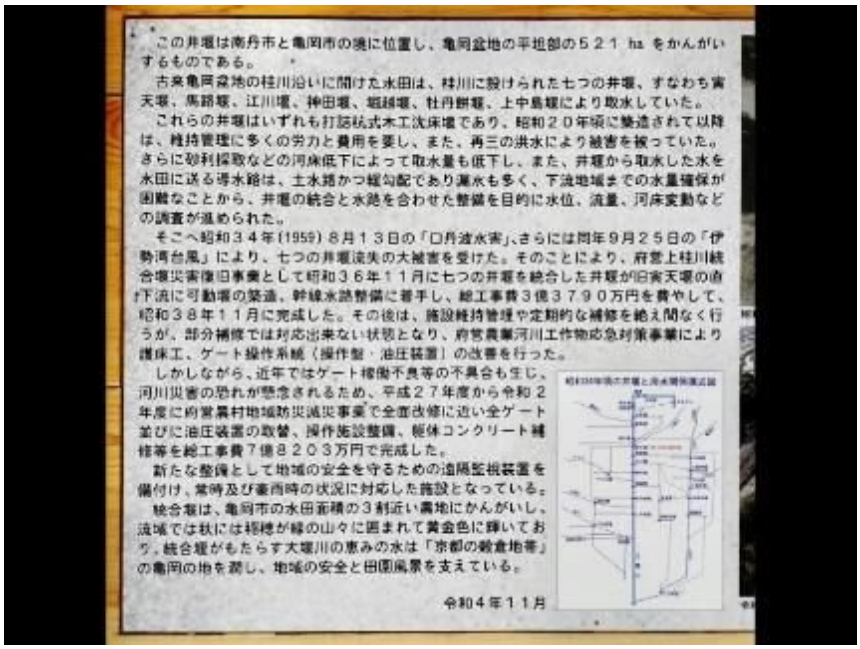
昔大宝年間（約一三〇〇年以前）大地震の大津波が押し寄せたのをここで切り返したと伝えられ以後天災地変から守る霊験と子育て病気よけの妙徳も聞こえる。

又、日本の原点真名井の神へのお取次もされると云うあらたかなお地蔵さんである。

二千五百鎮まる神の神はかり百の御生れの時ぞ近づく

平成八年八月八日

●南丹市八木町　上桂川統合堰　（分類困難・その他）水害



この井堰は南丹市と亀岡市の境に位置し、亀岡盆地の平坦部の５２１ ha をかんがいするものである。

古来亀岡盆地の桂川沿いに開けた水田は、桂川に設けられた七つの井堰、すなわち宮天堰、馬路堰、江川堰、神田堰、堀越堰、牡丹餅堰、上中島堰により取水していた。

これらの井堰はいずれも打設杭式木工沈床堰であり、昭和２０年頃に築造されて以降は、維持管理に多くの労力と費用を要し、また、再三の洪水により被害を被っていた。さらに砂利採取などの河床低下によって取水量も低下し、また、井堰から取水した水を水田に送る導水路は、土水路かつ緩勾配であり漏水も多く、下流地域までの水量確保が困難なことから、井堰の統合と水路を合わせた整備を目的に水位、流量、河床変動などの調査が進められた。

そこへ昭和３４年(1959)８月１３日の「口丹波水害」、さらには同年９月２５日の「伊勢湾台風」により、七つの井堰流失の大被害を受けた。そのことにより、府営上桂川統合堰災害復旧事業として昭和３６年１１月に七つの井堰を統合した井堰が旧宮天堰の直下流に可動堰の築造、幹線水路整備に着手し、総工事費３億３７９０万円を費やして、昭和３８年１１月に完成した。その後は、施設維持管理や定期的な補修を絶え間なく行うが、部分補修では対応出来ない状態となり、府営農業河川工作物応急対策事業により護床工、ゲート操作系統（操作盤・油圧装置）の改善を行った。

しかしながら、近年ではゲート稼働不良等の不具合も生じ、河川災害の恐れが懸念されるため、平成２７年度から令和２年度に府営農村地域防災減災事業で全面改修に近い全ゲート並びに油圧装置の取替、操作施設整備、躯体コンクリート補修等を総工事費７億８２０３万円で完成した。

新たな整備として地域の安全を守るための遠隔監視装置を備付け、常時及び豪雨時の状況に対応した施設となっている。

統合堰は、亀岡市の水田面積の３割近い農地にかんがいし、流域では秋には稲穂が緑の山々に囲まれて黄金色に輝いており、統合堰がもたらす大堰川の恵みの水は「京都の穀倉地帯」の亀岡の地を潤し、地域の安全と田園風景を支えている。

令和４年１１月

（碑文　背景）

淀川水系桂川に室町時代に築造された寅天堰を最上流堰とし、徳川時代に築造された馬路・江川・神田・堀越・牡丹餅・上中島の 7 井堰が亀岡盆地の平坦部約 760ha の受益地にかんがい用水を供給していたが、昭和 34 年(1959)8 月 13 日の口丹波水害及び同年 9 月 25 日の伊勢湾台風により、7 井堰の機能は根底より破壊された。

これらの 7 井堰を各改良区で早急に復旧することは困難であったことから、連合組織として昭和 36 年(1961)9 月 14 日付けで設立認可を受け、昭和 38 年(1963)11 月に可動堰、幹線水路の整備が完了した。

●南丹市八木町　大堰橋上流右岸堤防　（分類困難・その他）水害

（碑文　原文）

殉難碑文

昭和三十五年八月二十九日夜半ヨリ三十日の払暁にカケテ襲来セル台風十六号ハ集中豪雨ヲモタラシ八木町全地域ヲ水禍ノ巷ト化ス　町ハ直チニ災害対策本部ヲ設置シ災害救助法ノ適用ヲ受ケ自衛隊ノ派遣ヲ要請セリ

偶々陸上自衛隊福知山部隊は救助の任務ヲ帯ビテ急遽来町　舟艇ヲ操リ大堰川ヲ横切ラントシ　一等陸曹　服部政男　陸士長　谷川信雄　同　柳原正明ノ三

隊員ハ遭難　敢然トシテ職二殉ズ　ソノ志ヤマコト隣人愛ノ発露ニシテヨクソノ責任ヲ果シタルモノト言ウベシ　三隊員ハ平素自衛官トシテ本務二励ミ忠誠ノ誉　高カリシモノ　今大堰ノ川瀬静カニシテ勇士ノ面影ヲ偲ブニ由ナシ　町民深ク感激　痛惜ノ情已ミ難ク茲二頌徳ノ碑ヲ建テ水防守堤ノ鎮護トシテ永ク遺芳ヲ讃仰セントス

（碑文　背景　令和元年(2019)08 月 30 日京都新聞から引用）
京都府南丹市八木町の桂川で昭和 35 年(1960)、水害の救助活動中に亡くなった自衛隊員 3 人の 60 回忌の慰霊祭が 29 日、桂川右岸の殉難碑の前で営まれた。自衛隊関係者らが隊員の冥福を祈り、防災への思いを新たにした。
昭和 35 年(1960)8 月 29 日、台風 16 号の影響で、大規模な水害が八木町で発生。陸上自衛隊福知山駐屯地の隊員が救命ボートで桂川を渡ろうとした際に転覆して３人が亡くなった。慰霊祭には３人が所属していた第７普通科連隊重迫撃砲中隊の隊員やＯＢの会「福重会」のメンバーら 15 人が参列した。
僧侶による読経の中、参列者は慰霊碑に手を合わせて焼香していた。
福重会の会長は「全国で水害をはじめ、今までに経験したことがない災害が相次いでいる。八木での事故を風化させないようにしたい」と話した。

●亀岡市　亀岡駅南　水害標識塔　(分類困難・その他)水害

(碑文　原文)

昭和 35 年 8 月 30 日台風 16 号による浸水深 9m25cm

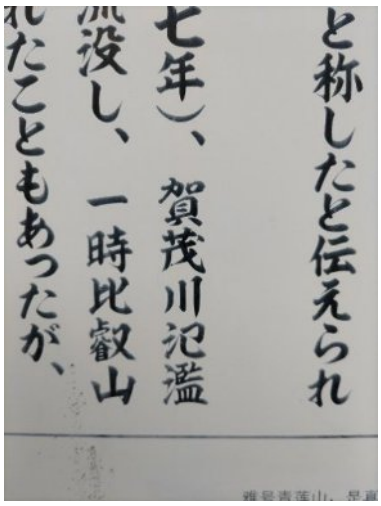
〇亀岡市　東別院村　(分類困難・その他)水害

（碑文　要約）

昭和 26 年（1951）7 月 11 日午前 7 時頃、雷を伴う集中豪雨により、各河川が濁流となって氾濫し、田畑や家屋が浸水、流失、埋没した。
ここ東別院町では 4 名の尊い命が失われ、全交通機関が途絶し、電灯電話も切断されて全くの孤立状態となった。

※当時の京都府林田知事の揮毫。

●京都市　下京区　明王院不動寺　（分類困難・その他）水害



（碑文　要約）

天歴年間（947～957）、賀茂川氾濫に遭い、堂舎はことごとく流没し、一時比叡山の苔延法師によって再興されたこともあったが、応仁の乱で荒廃し、石像も塵芥の中に埋もれてしまった。

●京都市　伏見区　羽束師神社境内　（分類困難・その他）水害

（碑文　原文）

久我の地から古川・樋爪・永垂・大下津・山崎を経て桂川に注ぐ本支流合わせて総延長十二粁余の人工水路モ問堀を羽束師川と呼んでいます。この川は桂川右岸低湿地の内水や悪水吐けの為に、文化六年（一八二三）から十七ヶ年の歳月をかけて新川の掘さく古水路の改修樋門の設置などの工事が完成しました。かくして二郡十二村の水場の人々は累代にわたる水害からまぬがれ、荒廃した土地は耕地にかわりその余慶は今日に及んでいます。しかるに此のエ事は官府の力

ではなく神明のご加護を祈り心身をくだき私財を投じて地域開発の素心を貫いた。
羽束師神社祠官で累代の社家古川吉左衛門為猛翁の独力によって成し得た大事業でありました。
文政八年(一八二五)工事が完遂するや羽束師神社の名を取り羽束師川と命名され西陣伊佐町井上傳兵衛氏は為猛翁の偉業を後世に伝えんと久我畷四ッ辻にこの道標を建立されました。爾来時は移り姿は変わりましたが、その功績を偲ぶに相応しき神社境内に鴨川町西村奈良松氏のご厚意をうけ昭和五十五年に現地に移設しました。今年は恰も工事着エより二百年の佳辰に当りこの偉業を称える為記念碑を建立し由緒を銘記した次第であります。

羽束師神社

●京都市　南区　天神川（現西高瀬川）改修碑　（分類困難・その他）水害

（碑文　原文）

改修之碑

夫天神川者貫流北野吉祥院両天満宮而遠注於淀江矣昔連曲為運輸之便今反而氾濫年年蒙其害不少也町村自治村長安田益太郎初図天神川改修之事而村長石原礒次郎亦継而尽力猶未至於実行大正十四年中塚儀一郎村長時有本村編入京都市之議売却村有財産以当改修費安田英之助深見徳次郎是主称始見村会一致之決議多年之懸案漸成焉然而昭和三年現村長平塚繁治郎組織東部耕地整理組合而依前設計直起工充改修費一万四千五百円四月二十五日竣工初挙渡橋式也惟此業村民常仰菅公威徳堤上植樹以連神苑拡路便宜深広河幅日夜呑吐於西部下水以後除尽水

害焉此用旧橋梁石材成碑為永記
組合長平塚繁治郎　組合副長深見徳次郎　工事係 石原長太郎 石原藤松　山下茂兵衛　田中末吉　安田信之助　設計者　島　貞仁　藤原俊直　工事者増田伊三吉　昭和三年四月二十五日　撰文書者　小木曽善弘

（碑文　要約）
天神川は北野・吉祥院の両天満宮を経由して、遠く淀川に注ぐ川である。
むかしは曲流し運漕に便利だったが、今では逆にたびたび洪水をおこし、吉祥院村は被害をこうむった。
村中安田益太郎が最初に改修を企画し、村長石原礒次郎も継承して尽力したが実行には至らなかった。
ところが大正 14 年(実は同 7 年)、中塚儀一郎が村長在任中に吉祥院村は京都市へ編入された。その時にあたり安田英之助・深見徳次郎が首唱し、村有財産を売却して工費にあてることが村会で議決され。多年の懸案がやっと実行に移された。
昭和 3 年現村長平塚繁治郎は東部耕地整理組合を組織し、これまでの設計に従いすぐに起工した。
改修費には 14500 円が充当された。昭和 3 年(1928)4 月 25 日に竣功し渡橋式を挙行した。工事の完成はひとえに菅原道真公の威徳によるものだと村民は堤防の上に植樹し吉祥院天満宮の神苑に連なり、道路を整備し河幅をひろげ、日夜京都西部の排水を導き水害の憂いをなくした。ここに旧橋梁の石材を利用し碑を建てである。その時かけかえられた高畑橋の旧石材を利用し、石碑を建てて記念とする次第である。
天神川(現西高瀬川)は屈曲し水害のおそれが常にあったので、地元吉祥院村ではその改修が懸案になっていた。
村では大正 7 年(1918)の京都市編入を機とし、村有財産を処分して着工し、昭和 4 年(1929)に竣工した。
この碑は吉祥院村による天神川改修を記念するものである。この碑ははじめ天神川(西高瀬川)の高畑橋畔に建立されたが昭和 42 年(1967)年の架橋工事時にゆくえ不明となったが平成 4 年(1992)に再発見され現在地に再び建てられた。
なお、この付近の堤防上は、長年、10 台以上のダンプトラックが駐車場代わりとしていたが以前、管理する京都土木事務所の指導により是正され、現在は、園路が整備されている。

●京都市　右京区　御室川治水碑　(分類困難・その他)水害

(碑文　原文)

治水碑　貴族院議員正三位勲二等男爵　北垣国道　篆額　山田得多書

平安城西双岡以南田野平曠村落相望御室川貫其間南流入桂川平時水涸無涓滴暴雨則濁流奔溢毀没田其害甚大脩治之費役作之労村民常患之京極村長湯川半左衛門等相議大改脩之梅津西院吉祥院三村咸賛之遂請官得允明治三十三年十一月掛工三十八年一月告竣改流域減長十二間餘而加広二間廃沿川地五千八百九十歩脩両長各千六百八十間餘高一間六分厚三間而其上殺三分之二費金弐万九百八拾円

其六出於官其四係村民之出於是村民始免積年之患矣乃相喜曰嗚呼是挙也能除難除之害以永福利宜建碑不朽其功遂来索予文予以郡宰親董是役当事吏胥皆能竭力規画以致是喜而村民之喜乃予喜也因不辞而係以銘不溢不壊偉哉治水一片貞紀功志喜明治三十八年六月京都府葛野郡長従六位勲六等有吉三七

組合管理者葛野郡長　有吉三七
関係村長　梅津村長　小山弥三郎西院村長　西村口太郎元西院村長　太田時治郎京極村長　湯川半左衛門吉祥院村長　石原菊太郎元吉祥院村長　小原伝之丞同　岡崎清右衛門　油小路魚棚北　石巳

(碑文　要約)
京都の西郊では、双丘より南は田野が広がり、その中に村々が点在していた。
御室川はその田野の中を流れ桂川に合流する川である。
ふだんは水が少ないのだが、大雨になると濁流があふれ耕地をひたし、その損害は大きなものがあり、川普請の経費や労力は流域村民の悩みの種だった。
そこで京極村村長湯川半左衛門らは大規模な治水工事を企画し、流域の梅津・西院・吉祥院の三村もこれに賛同した。計画の認可を受け、明治 33 年(1900)11 月に起工し、同 38 年(1905)1 月に竣工した。この工事で川の流れは 12 間あまり短くなり川幅は 2 間拡張した。
川沿いの土地 5890 歩を供して堤防を作り、その延長は両岸おのおの 1680 間余で高さが 1 間 6 分、下部で厚さ 3 間、上部で 2 間にも及んだ。総工費は 20,980 円で 6 割が京都府から支出され 4 割が地元負担であった。
治水工事の完成で永年の悩みが解決され、村民はこの業績を顕彰するために石碑を建てることを計画し私(葛野郡長有吉三七)に碑文を依頼した。
私は郡長としてこの工事に関係し配下の者もよく力をつくして完成に至ったのである。
すなわち村民の喜びは私の喜びでもある。
このためあえて文を作った次第である。

●京都市　西京区　大悲閣千光寺　大堰川開削工事での犠牲
（分類困難・その他）水害

（碑文　背景　大悲閣千光寺 HP から引用）

大悲閣千光寺は、京都の西、嵐山にかかる渡月橋から約 1㎞ あまり上流へ行った所にある。

千光寺は、江戸時代の豪商、角倉了以が、大堰川を開削する工事で亡くなった人々をとむらうために、嵯峨の中院にあった千光寺を、移転し建立させたもので、源信の作といわれる千手観音菩薩を本尊としている。

境内にある客殿「大悲閣」は、大堰川の切り立った岩肌に建つ観音堂で、嵐峡の絶景を眺めることができる。

昭和 34 年（1959）の伊勢湾台風で、大悲閣、千光寺とも半ば倒壊し、長年の間、千光寺は仮本堂、傾いた大悲閣はワイヤーに支えられていた。平成 24 年(2012)より大悲閣の改修工事が始まり、現在ではその優美な姿が見られる。

●京都市　西京区　桂川左岸　(分類困難・その他)水難

（碑文　原文）

水難供養　昭和四十三年吉月吉祥日　建立

〇八幡市　八幡在応寺（三川合流　背割り）伊勢湾台風最高水位記録標識
（分類困難・その他）水害

（碑文　要約）
台風災害としては明治以降最多の死者・行方不明者 5,098 名におよぶ被害が生じた昭和 34 年（1959）9 月 26 日の伊勢湾台風では京都府内でも死者 9 名、家屋の全壊 114 戸の被害があった。
当碑は伊勢湾台風の襲来時に木津川で記録した最高水位地点を示している。

●八幡市　さくらであい館　倒木さくら加工ベンチ
（分類困難・その他）風害

（碑文　要約）
平成 30 年(2018)台風 21 号により倒れた背割堤桜を使った「さくらベンチ」が完成した。

●宇治市　巨椋土地改良区敷地内　(分類困難・その他)水害

(碑文　原文)

此地もと巨椋池と称し、宇治・木津・桂三川と連れる一大湖沼にして、水禍連年絶えず、明治 43 年淀川改修で一沼沢となるも災害尚終熄せず。

水運魚獲の利益は、多く失はれることになり、土地の者夙に之を憂へ、干拓の急務を論じ、初め府営を冀ひしも果さず、現地の自営に頼るに及び、昭和に入

り、国営開墾の議起るや、万難を排し之が実現に努めし結果、昭和 4 年帝国議会に豫算の通過を見、同 7 年 2 月本池施工を決定せられ 11 月耕地整理組合を結成し、翌 8 年月起工の運に会へり。
爾来 8 年有餘の歳月を閲し、同 16 年 11 月竣工を告げ、遂に多年の宿望を達するを得たり。
干拓事業の経営は政府と京都府と組合との三者協力に依り、経費は国庫及び組合の支出に係り、合計 342 万 4 千餘円を算し、干拓田 650 町歩及び周囲既耕地改良 1 千餘町歩を得たり。
抑も巨椋池は、古く万葉集に其名著はれ、文人墨客の来遊相継ぎ、沿岸亦史蹟に富む。
近年天然記念物に指定せられし「むじなも」の如き水藻を首め、各種鳥類魚族の一大繁殖地にして、周辺住民は祖先以来其恵沢に浴すること尠からざりき。
吾等此地に生育し親愛の情浅からざりしに、今や地勢と景観との一新せるを望めば、懐旧の情甚だ切なり。而も滄桑の変に深く、聖代の餘徳を感ぜざるを得ず。
況や皇国未曾有の時局に直面し食糧増産のため干拓地域の利用多大なるを惟へば、吾等の光栄と欣悦とは文詞能く尽すを得ざる所にして、住民積年の艱難と奮闘と亦初て報いられたるに庶幾きをや、即ち上下内外に亘り関係各方面が一致協力の賜物なるを顧みて、向後一層の人和を計り粉骨砕身厚生に資し、以て時局克服に貢献せんことを期せざる可らず。仍て蕪文を撰して大要を叙し之を後昆に伝へんと欲す。細事は別に巨椋池干拓誌に詳にす。

昭和十七年十一月

●宇治市　塔の島　浮島十三重石塔　（分類困難・その他）水害

（碑文　背景　淀川河川事務所 HP から引用）

宇治橋の流失は魚霊の祟りであると考え、宇治川での殺生禁断の発布を朝廷に要請した。この要請を受けた朝廷は殺生禁断の令を発布し、網代などの漁法が禁じられた。

僧叡尊は中島に殺生禁断を誓った十三重石塔を建立し、基壇に漁具など納め法要が営まれた。

この島は古くは「浮船ノ島」と呼ばれていたが、この塔に起因し「浮島十三重石塔の島」で「塔の島」と呼ばれたと思われるが、この呼称が付いたのはどの時期か定かではない。この塔はその後の度重なる洪水で倒壊し、その都度修築されてきたが、宝暦 6 年（1756）の大洪水で流失してしまった。

その後 150 年ほど経た明治 40 年（1907）多田清蓮率いる「福田海」の人たちにより、下流河床から大部分が発掘され、唯一発掘できなかった一笠を制作して再建に着手、翌 41 年 10 月に開眼供養が執り行われた。

●城陽市　城陽排水機場内　(分類困難・その他)水害

（碑文　原文）
渠成治水弥栄郷土

（碑文　背景）
昭和 61 年(1986)7 月 20 日～22 日にかけての豪雨（総雨量 321㎜・時間最大 75m）に見舞われ城陽市内では、浸水家屋が 1400 戸を越える被害が発生した。この災害により、改修事業の抜本的な対応を求める機運が高まり、「河川激甚災害対策特別緊急事業」が導入され、古川の水を中間カットして、木津川へ直接放流する「城陽排水機場」が完成した。
これにより、父祖の時代からの悩みであった洪水の被害が解消されたことを祈念して、平成 2 年(1990)9 月に記念碑が建立された。

●城陽市　奈島　淀姫さん　(分類困難・その他)水害

（碑文　背景　城陽市 HP から引用）
生れ口樋門石碑と淀姫様の祠
昔、大水が出て下の浜の堤防がきれたとき、神さんが流されてきはったんや。
堤防に引っ掛かってたんを誰かが祀らはったんやて。それが淀姫さんで、水を守る神さんやといういい伝えや。
それは、木津川に堤防の杉に軒にお祀りしてある。
毎年、9 月 23 日に淀姫さん祀りをやっていて、屋形におさまっていはる神さんにお菓子をお供えして、神主さんが祝詞（のりと）をあげはる。
昔は、神主さんに宮総代・奈島の氏子などが、皆、白装束で行かはった。
ちょうどお彼岸の季節で、堤防の河原にずうっと彼岸花が咲いていてきれいやった。
子供はお菓子をもらうのが楽しみやった。

●久御山町　若宮八幡宮前　（分類困難・その他）水害

（碑文　原文）

木津川底ヨリ水量標

●久御山町　室城神社①　（分類困難・その他）水害

武内宿祢神社

（碑文　要約）
土砂寄附者　井手村　仁木　榮
大正元年木津川改修之口口移轉人家四十三口庭為湿地
茲運土砂動樹石　同五年春

（看板）
当社は、聖武天皇の神亀年間（724－29）、近国に大洪水があり、民衆が飢えていた時、勅して天神地祇をこの地に奉祀したのが始まりとされる。
また同天皇の御代、悪疫流行に際して、当社に弓矢を献奉して、その退散を祈願された。今に伝わる春祭（矢形餅神事）の起源とされ、神事では弓矢を象った特殊神饌が供献される。
また、寛永 7 年（1960）、木津川の堤切れにより、当社の壮大な社殿は諸記録と共に流出した。その後再建された社殿は規模が縮小され、今なお仮殿であると伝えられている
当社は境内に護国山神宮寺と称する宮寺を有していたが、明治維新に際し除かれた。
（久御山町 HP から引用）
木津川右岸堤防に沿って細長く伸びた下津屋集落の東寄りに室城神社が鎮座している。津屋の森と呼ばれる 1100 坪余りの広い境内は、たえず小鳥のさえずりが聞こえ年間を通じて鳥の楽園になっている。
室城神社は、「久世郡祭神記」（京都府教育会久世郡部会編）によると聖武天皇の時代に近国に大洪水があり民衆が飢えていたとき、勅して天神地祇をこの地に祀ったのが始まりとされている。名前の由来を調べると「神社要録」に室城とは室樹のことをいい、当社はこの地区を開拓した豪族のえむろのむらじ榎室連の祖を祀った神社であろうとしている。また下津屋は古くから木津川の舟運の津として発達した集落と考えられることから、津を守護する（住吉神社）を祀ったものと考えられる。

●久御山町　室城神社②　(分類困難・その他)風害

（碑文　原文）

昭和三十六年第二室戸大風ニ於テ本殿倒壊及び舞殿半壊ニヨリ
御本殿舞殿復興

昭和三十七年四月吉日竣工　氏子一同

●久御山町　大松寺　（分類困難・その他）水害

（碑文　原文）
木津川決壊水量標

※御住職の奥様に聞き取りしたところ、
「この石碑は他所から移転されたもので、石碑の基礎を付け足した可能性があり、必ずしも当時の水位高を表しているものではない」とのこと。

●木津川市木津町　正覚寺境内　洪水供養阿弥陀石仏
（分類困難・その他）水害

浄土宗
正覚寺

洪水供養石佛
正覚寺

（碑文　原文）

（右面）

正徳二年辰八月十九日洪水によって、此川筋の近在辺境の人民おぼれ、死するもの幾千人といふ数をしらす

（中央面）

今日第三回忌にあたれるをもって、彼亡者のぼだいのため、此阿弥陀仏を造立し、ながくここに安置し奉る。かねては又、

（左面）

往来の貴賤男女をしてこの尊像を拝し心々の回向をなさしめ自他平等の利益とせんことを願ふのみ

（他の六角面）

正徳四年甲午天八月十九日、願主京都住人大八木弥右衛門敬白

※正徳二年は 1712 年

●木津川市山城町　泉橋寺　(分類困難・その他)水害

（碑文　背景）
正応 5 年（1292）の洪水の水害横死者の供養を目的として 1295 年から 1308 年までの 13 年かけて作られた。
日本一の石造地蔵、高さ 4.58m。

（木津川市観光ガイド HP から引用・諸説あり）
東大寺を建てていたころのお話です。木津川の水運を使って材木を切り出していた。水が多すぎても少なすぎても、材木はスムーズに運べなかった。
ある年、雨が少なく笠置あたりで材木が止まり、水を堰き止めるかたちになってしまった。下流の田畑は干上がる恐れがあったので、大騒ぎになった。そこ

で、行基様というお坊様におすがりすることになった。
翌日から行基様のご祈願が始まった。そして満願の日、あっという間に大雨が降った。みんなは喜んだが、惨事も起こった。谷間を流れる木津川の急流は激しい流れとなって、川の中で働いていた人を呑み込んでしまった。
行基様は自身の罪のように嘆かれ、お地蔵様を供養することになった。
そんなある日、行基様の枕元にお地蔵様が立たれ、「木津川を見守るために日本一の高さにしてほしい。
立っているばかりでは疲れるので座らせてほしい」と言われた。
翌日、行基様は言いつけどおり大きな石を木津川から取り出した。こうして作られたのが、泉橋寺のお地蔵様。
戦火や風雨があるのでお堂を作ろうという人もいたが、「お堂が無いほうが木津川の流れが良く見えます」とお地蔵様がお断りになった。

●木津川市木津町　木津惣墓五輪塔　（分類困難・その他）水害

（碑文　原文）

地輪

（東面）刻銘：「同七月十五日阿弥陀経、一万返光明真言口口、和泉木津僧衆等、

廿二人同心合力、勧進五郷甲乙諸、人造立之各毎二、季彼岸光明真言、一万返阿弥陀経、四十八巻誦之可、廻向法界衆生」
地輪
（南面）刻銘：「永禄五年（1562）壬戌、妙林口口、道心禅門、妙心道心、十月二十七日、妙口、善通、妙口、口口、口口」
（室町時代末期 永禄 5 年（1562）の追刻がある）
地輪
（北面）刻銘：「木津郷口口口廿坪内自、未申角木屋所一段自、藤口口未以光明真言、本・・・・・・分、口者・・・・・時正、永仁四年八月十九日」
（正応 5 年（1292）の造立から四年後、永仁 4 年（1296）の追刻がある）

（碑文　背景）
鎌倉時代、正応 5 年(1292)の建立された、高さ 3.6m、花崗岩製の五輪塔。
惣墓とは、一般大衆のあいだに個人墓が普及していなかった時代の葬礼儀式の一形態で、いわゆる共同墓地という意味をもっており、主に大和・山城地方に分布している。
水輪にキリーク(梵字)が彫刻され、地輪東面に正応五年の造立銘、北面に永仁 4 年(1296)、南面に永禄 5 年(1563)の追刻銘がみられる。建立年代の判る五輪塔として貴重なもので国重要文化財となっている。
伝承によれば、木津川の氾濫で死亡した人々の供養のために建立された。

●木津川市木津町　殿城所在地　関東丹後但馬大震大災死者大菩提
（分類困難・その他）地震

（碑文　原文）

関東丹後但馬大震大災死者大菩提

（番外）

●京丹波町和知町　セカンドベスト避難場所　水害

（背景）

平成 30 年（2018）の西日本豪雨の時に孤立し、9 名が取り残されたが、消防団の方々の咄嗟の英断で、指定の避難所ではなく、次善の場所の高台のお堂に避難され、難を逃れられた京丹波町和知町の上乙見地区の高台のお堂。

「ベスト」だけではなく、次善である「セカンドベスト」の避難所として語り継がれている。

●福知山市大江町　蓼原災害駐車場　水害

（背景　令和元年(2019)10 月 25 日　両丹日日新聞から引用）

水害時の車両避難所、集落高台に住民らで 50 台分整備

←工事中写真（両丹日日から引用）

毎年のように洪水被害を受けている京都府福知山市大江町の蓼原自治会は、由

良川の水害時に住民たちの自家用車を水没から防ぐため、地区内の高台に車両専用の避難所（駐車場）を造った。
中部地方から関東東北に大きな被害をもたらした台風 19 号では、避難途中に車の中で被災した人もいることから、自治会では「一人の犠牲者も出さない」の合言葉のもと、住民たちが力を合わせ駐車場の整備に励んだ。
由良川の越水で、たびたび洪水に苦しめられてきた蓼原地区は、堤防整備が進んだ昨年の 7 月豪雨では、今度は内水被害が発生した。
多くの家屋が床上浸水したほか、車両 2 台が水没。
自治会で区民に車両についてのアンケートを取ったところ、住民たちが約 80 台の車を所有していて、このうち約 50 台の車の持ち主が車両専用の避難所の設置を希望していることが分かった。
洪水時に住民たちは、水がつかない山間部へ向かう市道沿いなどに車を駐車するしか無かった。そこで、安全にとめておくことができる専用の駐車場を造る計画を立て、自分たちで整備に取り掛かった。
場所は、7 月豪雨の際も浸水しなかった集落山側の空き地で、住民から提供を受けた。広さは約 300 平方メートルで、車約 50 台が駐車できる。
8 月下旬から雑草を刈り、土を盛るなど整備を進めてきた。10 月 20 日には住民約 30 人が参加して仕上げた。
自治会の自主防災会のリーダーは「災害発生時、車両避難中に犠牲になった方がおられる。
蓼原では、まず避難希望者を区外の避難所に送ることを優先し、そのあと車を安全な地元の専用避難所に移すことで、区民の生命と財産を守っていきたい」と話されている。